第九巻
第拾壹號

大正三年十月一日發行 大正三年九月二十八日印刷納本
明治三十七年五月七日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

要目

女子青年會第十一巻第九號

目次

YOUNG WOMEN OF JAPAN

(JOSHI SEINEN KAI)

Volume XI　　October, 1914　　Number 9.

會説

病院と戰爭

河井道子

本年の夏は過去何十年にもなき酷暑とか申しまして何地ともに概して病人が多かつたやうで御座いました。諸姉の中にも此休暇中に、家族親戚友人間に病者死者の苦き經驗をなされた方も多い事で御座いませう。私も八月中に病人の看護として二週間を病院內に送りまして、今迄になき活きたる學問を致した樣に感じます。實に一人の病者を健全に復せしめん爲には、其要する時間勞力金錢は言はずもがな、幾多の醫師看護人及び身寄友人等を煩はせ働かせる事は、到底數へ盡す事は出來ないので御座います。啻に一家の重要な人とか、或は社會の有力な人とかに於て然るのみならず、社會に於ても一家に取つても厄介者視せらるゝ患者に對しても矢張り同樣でありまして、其苦勞心配費用は決して尠少ではないので御座います。加之、自業自得で汚れた不治の病疾に襲れた者、又は不幸にして白痴不具に生れた者に對してさへも、社會といはず個人といはず、之れが施療施藥救濟保護に注力して骨折つて居る事の如何に多いかは誰にも能く知らるゝ所でありませう。之れを見ましても平生無病を誇り自由を樂しんで居りま

す者は、時々病院育兒院養老院等などを訪問して、自己の身の幸福を感謝し、又社會公共の事業に同情すべき筈のものと思ふので御座います。

古哲プラトーは、理想境を描いて、健全なる父母より健全なる子孫を出し病者不具者は放棄するに如かじとの說を立てましたが、太古の野蠻人は所謂優勝劣敗で此說を有の儘に實行したもので御座います假令埃及の文明、希臘羅馬の開化時代に幾分か醫術が行はれたと申しましても、是は重に高貴な人々の贅澤に過がなかつたので御座いまして、眞に憫むべき者を憫み、弱者を助けて强者たらしむるといふ事と仁術とは、全く耶蘇基督に於て始て實行されたものであるので御座います。實に、すべての仁惠慈善の事業は基督を離て起つたものは無いと申しても差支ないので御座いまして、彼の今日世界的となつて居る赤十字社の事業などでも、其赤十字の徽章の由來を調べて見ましたならば、能く基督教との關係が了解されると思ふのであります。所謂「傷める葦を折ることなく煙れる麻を熄ことなし」の精神を實行されし主基督に於て世界に慈善事業の根底が定まりましたので御座います。

私はかういふ事を考へながら現在全世界の上を掩ふて居る戰爭の事を思ひ及んだので御座います。彼と是とは天地の相違ある事柄でありまして戰爭程愚な非文明な現象が、またとありませうかと感じたのであります。先づ戰爭といへば大勢の中より選りに選つた身體壯健頭腦明晰なる血氣盛りな最も働き榮えのある壯年者をのみ集めて、之に多額の費用をかけ、充分なる軍隊敎育を授け、或は、假令常備の軍人たらずとも一朝有事の日に義勇兵として出陣するものは、皆頑丈にして賴甲斐ある男子であります此等の人々をして且に屠らしむるのでありますが、如何なる表面の理由があるとしてもこの樣な事は人情の上よりは云はずもがな、利害得失の上より打算しても明に其是非を判斷し得らるゝ事であります。啻に有爲なる壯年者を喪ふといふばかりでなく、ひ

いて國家の損失一家の困難、更に其惡影響の及ぶ事は一通りではないので御座います。或人の話に「日露戰役後その戰死者の遺族中より出た不良少年少女は少なくない」といふ事でありましたが、其理由は如何に親が名譽の戰死を遂げたと申しても其遺族が糊口に迷ふて一時は親族朋友の護援を受けたとしても、さう〳〵は續けられるものでもなく、窮迫の餘、終には望ましからぬとは承知しつゝも子女の處置をつけたり、又は自身にも內職や出稼をせねばならぬ年若の未亡人も出來る場合、自然と法律上道德上の罪人を出すやうな事にもなるのであるといふのであるそうです。私は之を聞て眞に恐しく感じたので御座います。

又、戰爭の損害は之れに止まりません、國家經濟の上から打算しても不經濟の極であるといふ事は誰しも承知して居る事であります。嘗て米國の有名な經濟學者が「今日は世界大戰爭は不可能である經濟界が之を許さない」と斷定したので御座いますが、其は經濟上の眼識から言ふときには決して誤りではないと存じます。今は不幸にして其斷定が外れて世界的大戰爭が起りましたが、之れとても經濟方面に頓着なく勃發した異常の現象であつて、現にこの戰爭の起りし以來、全世界に於ける經濟界の打擊は非常なものである事は天下の認めて居る公然の事柄であります。

戰爭の起つた時に於て、さうであるばかりで御座いません、平時に於てもこの軍事方面に費さるゝ費額は何れの國に於ても實に容易ならぬ夥額で御座いまして、歐洲邊りの先進國でも軍備破產を唱へるものがあつて、常に軍備縮少の意向が漲りつゝあるといふ事は屢々傳聞した事で御座います。現に我國の如きも陸海軍の問題で年々歲々國も家も個人も惱まされて居る事は誰人も能く承知して居る所ではありませんか。

而して更に、人間を敎育する方面に對する努力は如何であるかと思ふと、之はまた實に戰爭軍備など

の方面に比しては微々たるものであつて到底日を同ふして話す事は出來ないのであります。手近く我國に就て考へて見ましても、幾千の青年男女が教育を受けたいと絶叫して居るにも拘らず、其設備が足りなくて之を收容する事が出來ず、徒らに精神界の浮浪者にして仕舞ふやうな悲境に陷らしめて居るではありませんか。一方に此等の缺陷を控へて居りながら、闇雲に戰備軍事にのみ之れ汲々たるは苟も國家の前途に着目するものゝ輕々に看過する能はざる事であらうと思ひます。況んや、彼は殺すもの、此は生かすもの、彼は喪ふもの、此は造るもの、彼は消極的、此は積極的、深く其國家社界の將來に關係する點から輕重得失を考量して見ると如何なる鈍物でも容易に判斷が出來る筈で御座います。之れが全世界を通じての情態であるとすれば、我等女子といへども對岸の火事視して居るべきではありません。斯る徒費のみならず社會家庭個人に及ぼす惡影響に對しては斷然戰爭行爲の撲滅全廢を唱導せなければなりません。

世には隨分誤つた意見を持つ人もあつて、子供に尙武の氣象を與へなければ柔弱な臆病者を造るといふやうな點から戰爭熱に捉はれる者もあるので御座いますが、私は特に母たり師たり姉たる方々に申上たい、その樣な謬見があらば一刻も早く其思想から離脱されねばなりません。銃や劍を以て人を驚かせ他を脅かすが如き、或は之を防禦的に使用すると申しましても決して褒めた事ではありません。

世界で模範となつて居る英國倫敦の巡査は劍は愚か棒も杖も何も以て居りませんが彼等は實に勇敢な者で彼等に依りて市の秩序が保もたれて居ります。又先週某軍人が昨年の支那事變に南京を視察した時の話の一節に一丁南京の至極危險な交戰地附近に行て砲聲銃聲中々物凄い野原に差掛つた處が誰一人居らぬ此淋しき恐しき處に十四五歲の一英兒が佇立して通行せんとする我等を呼び止め英語にて此先は危險ゆゑ行かぬがよしとて注意して吳れた。彼は藥嚢

を懸けて居た處を見ると負傷兵を世話する者だらふ其内に一人の支那兵が出て來て彼に何か呟いて二人して危險地の方角に馳て行つた、其支那兵は多分負傷者があつたので呼びに來たのだらふ。實に此一少年には一同が感服した云々」とあつた。此少年の母たり師たる者は彼に眞個の忠義と勇敢は危險地にありて人を救ふにあつて殺すのではないと敎へたものと敬慕に堪へません。かゝる勇士を敎育するは尙武熱や軍人氣質のみでは駄目で御座います。人を殺すために死せず、救はんために死ぬ意味を充分に皷吹しなくてはなりません。

私は、始終人々から「私共基督信徒婦人は戰爭の際に如何なる心得を持つべきか」と尋ねられます。私は思ひます、最早勇武を以て譽とする時代は過ぎ去りました、殺伐切傷は人事界の耻辱であります。私は基督信徒の家庭に於て其子女を敎育するに戰亂時代の物語を以て武を奬勵したり、武器の玩具を與へたり、唱歌に血とか敵を切れの殺せのといふやうな詞を用ひたり、又は人殺の眞似をさせたり、仕て見せたりする如き事は全廢して欲しい。九月十三日の萬朝報に小學校の生徒が戰ごつこをなし敵味方と隊をなして小石の投合をなし居る中十三歲なる小供の右眼に命中せしため失明したとの記事がありました斯の如き例は此外にも澤山あると存じますが、是れ等も詰りは戰爭奬勵の結果では御座いませう。如何にも悲しむべき事と思ひます。斯く申せば我等は如何にも柔弱なる主義なき恐怖心の强き輩と見做す人もあるかも知れません。併し、劍は元來臆病者の持つべきもの。眞の平和を主張し其主義の爲に倒るゝ者こそ本當の勇者であると私共は確信致します劍を持つものは劍をもつて倒れん、柔和なる者は幸なり其人は地を繼ぐ事を得べければなりとはキリストの御詞で御座います。どうしても世に勝つものは軍隊でも武器でも御座いません、我等の信仰する基督の精神で御座います。此精神を我々婦人の間に益々勃興せしめ、子女子弟を敎育するに當り此精神を皷

吹して人々個々が武器を捨て敵を愛する様に爲すべき義務があると思ひます。國家を護るは固より男子の大責任であり、之に對し我等婦人は多大の敬意と感謝の念を以て居ります。併し一方に於ては眞個の平和主義を子孫に皷吹し以て國の要となさしむる爲には婦人こそ國家を護る者と言はなければなりません。又斯く公認される様にならなければなりません。

何卒、基督教を信奉する我等は、お互に此の忌むべき戰爭其の物を廢絶するは勿論、これに關聯せる謬見を排除し盡して一日も早く我が國のみならず、全世界の上に眞の平和あらしめ給へと祈る様に切に希ふて止まないのであります。

修養會所感

（一）

水戸　大川喜代

修養會にて深く感じました事は私の様な少な人間も矢張り神から惠まれて世に遣されし事で御座います、然ども私の様な信仰にも行にも足らぬ者が神を世に紹介せねばならないと思ふと恐れ多く又眞個に如何してよいか分らぬ様になります來學期からは出來る丈働き度いと思つて居ます、日曜學校の方にも師範の方にも、自分の置れた處にて神の爲に身を捧げて働いて人様達の萬分一でも眞似たいと存じます、且また何でも喜んで仕ようと決心致しました。

（二）

宮城　河東田きい

あの短い一週間の修養會がどんなに有益であつたかわかりません諸先生に伺ひまして感じました事は深く刻みつけて歸宅したら今まで とは生れ變つた生活をしようと決心して勝男館を辭しました、併し自分は今まで多くの罪惡を犯して居りましたし生れ變つた行は實行となると中々容易では無い事を知りました、さはいへ出來るだけ勇氣を出してこの頃努力いたして、自分では確に修養會前とは少なからず變たと思てゐます、只今では靈釜に參り毎日少しつゝでも凡てを修養してゐます、不思議に毎日必らずある新しい事を悟るので御座います、そうして希望に滿ちた愉快な月日を送つて居ります、今では眞に熱心に信仰の進む様努めて居りますが、是が一時的の感情でない様に祈つて居ります、又可成多くの人々に接して色々のよき御話を聽く様にして居ります、今までは何事を致すのも苦痛でしたが此頃は愉快で嬉しう御座います、何でも出來ない事はなからうと存じやつて見ます、又神様は吾等に出來ない事を命ぜらるゝ理由がないと信じて居ります。私の宅は山の上で御座いますので凉しく綠滴たる窓際で讀書いたし。時には「日々の力」を懷中にして後の山に參りまして清々した所で胸をきゝつゝ愛誦いたします中に沖の島がだん／＼暗く町の燈が松林を通じて斑々とかゞやきます。

秘藏せられたる眞生命

植村正久

「我が女子青年界」は牧師植村正久先生の承諾を得て本號より以後毎號同先生の説教の大要を掲載することゝなりました。玆に掲げたるものは即ち其第一回であります。　記者誌

世の中には普通人の眼に見えず認識されて居ぬ生命がある、之が爲にエスの如きも世間の人からベルゼブル、鬼の王と云はれ家族の者親類までがエスの擧動を狂者と見た。ユダヤ、ギリシヤ人には愚なるもの是を信ずる者には救の力となつた。エスは世には愚なるもの弱いもの工匠の棄たる石であつた、しかし役に立ぬと棄てられた石が却て家の首石となつたと聖書は云ふてゐる、是はキリストの事を指すのだが、かゝる事が今日にもある、今日の戰爭を見よ若獨逸が我等の豫想通り敗北して酷いめに遭遇ふとする、彼國を救ふものは何であるか、今日の獨逸はエスの十字架の教を輕じて居るかも知れぬ、却てエスより外の精神氣風や豪傑風の事が自國の勢力と思惟ゐたが、豈圖んや隅の首石はキリストにして彼の外に救の無い事を自覺して神を敬畏するに至らば、それこそ敗軍却て國家の助、幸福になるであらう。

「また天國は畑に藏たる寶の如し」人の氣付かぬ處に貴重きものあり、畑は別に詩的のものではない、ミレーの如き畫家なれば其中に面白い意味を會得するならんが、普通は餘り深い趣味も値打もなさそうであるが其中に藏れたる寶があるとはエスの御詞である。人生と云ふものは果敢いもの、時には餘り詰らぬとして自殺までも計る連中がある、併其中に我等が又天にも昇る實に尊き處の生命がある、賦與へ

られて居る、これは眞の神を信仰し靈の價値を識らんと出來ぬ相談である。甚麼人生の詰らぬ中に御同樣實を發見し度ものである。

エスが或時旅の疲勞で休んでをられた時に弟子が食物を持つてきたら「我に汝等の知らざる食物あり」と仰られた、只金儲をする、出世立身する、勢力を逞しくするとか此等のありふれたものゝ以外に食物がある、此食物を食するものは哥林多後書六章にある通りの人々である。即ち人を惑す者に似たれども眞實、人に知れざるに似たれども人に知られ、死たる者に似たれども生る者、責を受るに似たれども殺されず、憂るに似たれども常に喜び、貧に似たれども多の人を富し、何も有ざるに似たれども凡の物を有つ。如何なる境遇にたちても、びくともせぬのは人の知らざる食物を食する爲で信者は此食物を食する。勿論信者中にも名のみの者もあるが、眞の信者には吉凶禍福凡てに於て他と異る點がある。病に罹る死に瀕する或は貧すら鈍すると云ふ場合に確に違ふ。或信仰厚い者があつた此者に人の知らぬ苦痛があり幾多も祈つたが依然として苦痛がある、其時彼は「我恩寵汝に足れり」との神の聲をきいて却て苦痛を感謝した、彼は人の知らぬ食物を食して居たからである。

約翰傳第二章にエスがカナの婚筵に列された記事がある、其場に出た酒は後からのが始のよりは遙に勝り酒酣にしていよ／＼旨酒が出た、今日英國の戰ぶりを觀るに此流で精鋭の兵士が後より續々來る我等の信仰もかくあり度きもの、益々深く愈々廣く一時に皆繰出すでなく、とつときのものがある餘裕がある樣にしたい。抑も人間は外面以上に惡いものでもあり又一方には實際、外に顯れてゐるより善良いもの貯へがある、とつておきがある、我々の最もよきものは未だ表面に出て居らぬ。我々には生埋めにされた即ち葬られた生命がある、そこで支那では人皆堯舜たるべしと謂ひ、基督では人皆神の子と云ふ即ち我等の眞の生命は神と共に藏れてゐるので神

と結ぶ其間の親が増すに従ひ此生命が發達する、而して此生命はエスを信仰するより外に得られない、此生命は秘藏息子の生命此なきものは下司下郎の生涯である。眞に神の子たる者は祈の生涯を送らねばならぬ。又聖書を熟讀む事が大切である其内なる聖意を發見する事に努力が必要である。かの聖ヲガスチンは「我に從へ」との神の聲をきゝて涙を流して十何年も因循な生活をして居た事を後悔し彼は大決心を成すに至つたのである。祈禱と聖書の力によりて眞生命に這入つた人物の傳記は他にも澤山にある何故かと云へば我等はエスを識に從ひ己が詰らぬもの罪深き者なる事に氣付き又羊の如く各々己が思ひの儘の方に馳せて迷てゐる者と自覺する、そして終にエスに來り眞個の我を發見するのである、パウロの「我キリストと偕に十字架に釘られたり既われ生るに非ずキリスト我に在りて生るなり、今われ肉體にありて生るは神の子を信ずるに由りて生るなり」との大信仰が湧然として來る。ヨハネが「世の罪を任ふ神の羔を觀よ」と云つた、エスの精神其心ゆきを朧げながら感して動いた弟子等はエスに從ひ遂に眞の自分を見出したのである。我等の生命は實にキリストの中に藏れ居るもの、キリストを識るこれ眞生命、眞材を堀出すものであれば御一所に此かくれたる大切の寶を得度いものである。（文責記者）

神の選民

（前號の續き）

山室軍平

第四。神の選民は精神的には世を捨てた者でありますが、併し改めて此世に遣はされた者でなければ

なりません。眞の信者には誰れでも皆何か神より使命を與へられて此世に送られたと言ふ經驗がある筈で御座います。神が大なる使命を與へて基督を此世に送り給ひし如く我々も亦基督によつて此世に遣はされた者であらねばならぬのであります。例ば海底に働く潛水夫の樣な者であります。潛水夫は空氣なしには魚でないから海底に在ることは出來ないので絕えず上より送管によつて新鮮なる空氣を送るのであります。我々も此世にあつて罪の中に働く場合に於ても絕えず神との繫ぎを保ちて神の靈氣に觸れて居らねばならぬので御座います。

米國の或市で一名の救世軍の女士官が或る口にするも厭はしい商賣をする家に行つて話をして居た所へ市役所の役人が此邊に天然痘患者があるといふので調べに來た、すると其患者は丁度其女士官が今話して居る家であつたので其の家は直に交通遮斷になつて其女士官も此家を出る事を差止られて恥づ可き家に數日を過さなければならなくなりました。併し此女士官は勿論斯る所に陷る可き人ではありませんそれと同樣に我々を此世に住んでは居るもの丶、實際は決して此世に屬す可き者ではないのであります

また、聖書にアブラハムの僕はアブラハムの息子イサクの嫁をさがす爲に遣されて其役目を果す迄食事もよくせなかつたと言ふ事が書いてあります。我々眞の信者も亦斯くある可き筈であると思ひます。神への御奉公。此が何より大切な事。生活とか何とか言ふ事は第二第三の事であります。「汝等先づ神國と其の義を求めよさらば此等のものは皆汝等に加へらる可し」であります。かの新島氏は「彼等は世より取らんと欲す我れは世に與へんと欲す」と言はれました。我々に取つては此の世の榮冠財寶建物等は凡て欲しいものではありません、たゞ何か世の爲になる仕事をして行きたいものであります。大隈伯がよく言はれるでありますが、ブース大將程大膽に伯に頭をさげさせた者はない。ブース大將が伯を訪ねられた時に「あなたの爲に祈る」と言つて熱心に神

に祈られました、そして暇を告げて伯に送られて玄關迄來られた時に代議士の藪原と云ふ人がブース大將に「大將よ伯の庭園は隨分立派で有名なものですが御覽になりませんか」と言つたら大將は莞爾として言はれるには「いや、また今度日本に來たら其時に拜見しませう、私の住居はもつと／＼立派な天國にある」のであります、と言はれました、實に何とも大膽な言ひ方でありませんか。此は大將に其確信があつたからこそ言はれたので御座います。私共は肉體を有つて居るものでありますから身體に必要なもの丈は取らねばなりません、けれども若し出來るなら其も廢めたい位で少しでも多くを神の爲に用ゐられるやうにする筈と思ふのであります。

第五。神の選民は世に遣はされた者である許りでなく神と共に世と戰ふ者でなければならぬので御座います。敎育があつても、なくても、男も女も皆神の兵士であります。古來信者は皆世と戰て居る者であります。我々の主も亦常に戰爭の生涯を送り給ふた。主の十字架は實に戰爭の向傷であります。ポーロもペテロも戰ひました。我々は少しは主の爲に戰ふた積で居るかも知れない。併し昔の人達は血を流す迄戰ひました。「なんぢら惡と爭ひ拒て未だ血を流すに至らず」我々は中途半途の生活をしてはなりません。我々は只信者となつて淸い生活善き働をなす許りでは足りません。ブース夫人の言にもある通り「迫害なきは吉兆ならず」で眞面目に神の御旨を此世に行ふて行けば必ず迫害を忍び恥と苦痛を甘受して喜んで十字架を負ふて進む可き筈であります。嘗て講壇に立つて非常に人を引付る力ある天主敎の僧がありました。誰れも此の人が如何にして此樣な力を有つて居るかゞ分りませんでしたが、長いこと經つて後に漸く其の理由が分りました。其は此の僧の住んで居た會館下の一室に丁度身の丈程もある十字架があつて此の僧は集會前には屹度此室に入つて自らの身體を其の十字架に當て手足を縛して鞭で自分を撲たせて、せめては主耶蘇の御苦痛の一部分でも實

驗したいとつとめたのであつたと言ふ事であります此樣に世の救の爲に其の獨子をさへ下し之を十字架にまで付け給ふた神の御苦痛の一部分なりとも身に負ふて公衆の前に出る時に、言はす語らずの中に人を引付くる靈氣があつたと言ふ事は尤なことで御座います。主耶蘇は我々の罪の爲に十字架の苦痛をさへ忍び給ひました我々は如何なる苦痛があらふとも主の御名の爲に充分戰ふ事の出來る信仰を燃し度きものであります。

第六。神の選民は世と戰ふのみではない、猶進んで世を救はねばなりません。主が我々を救ひ給ふたのは只我々を救ふて天國の幸に與からしめ給ふのみの御旨ではありません。進んで世の人を主基督に導かせん爲に責任を帶はじめ給ふたのであります。故に眞面目なる信者は同胞の救、進では全世界の救の爲に力を盡す筈であります。また、我々の神は愛の神であつて我々の中に愛の靈を滿しめ給ふものであります。而して愛と言ふものは必ず自分獨りの中にのみ止る可きものでなく、必ず他に及ぼす可き性質を有して居るものであります。彼のエステルの如きは特別に多くの者の中より選まれて皇后の位地に上つた者でありますが、彼は決して其地位を私せなかつたので御座います。彼は一旦同胞の危難を知るや直に立つて身命を賭して「若し我れ死ぬ可くば死ぬ可し」との覺悟を有つて王の前に立つたのであります。實にエステルは自らの地位を善用した立派な婦人の模範であります。今あなた方がその樣な樂な榮譽ある地位に置かれて居るのは單にあなた方に氣樂な生活をさせ樣と神が置き給ふのではない必ずや大なる使命を與へ給ふのであると思ひます。私共には智識がなくとも又た富がなくとも堅き意志さへあれば必ず仕事は出來るものであります。先年死去した露國文學の飜譯で名を知られてる二葉亭氏の未亡人が二三年前に信者になられた。此の人は家に召使ふて居た救世軍の信者の女中の眞面目な務振りや、飾らざる單純な美しい信仰などを通じて漸次に導かれ

て信仰生活に入る様になられたと言ふ事であります我々には何がなくとも、只神の爲に働くと言ふ精神さへあれば乾度成し得らるゝのであります。今年救世軍では一枚のすり物を一同に渡しました。其は今此日本に眞面目なる一人の信者であつて今年の中に眞の信者一人を造り、來年は二人が二名の信者を造り次年には四名が四人の信者を造ると云ふ様にすれば我六千萬の同胞を救ふ事は僅々二十六年で出來ると云ふ事が書いてあるので御座います。今茲に稀世の宗教家が現はれて毎日百人づゝの人々を信仰に導としても我が六千萬の同胞を救に入るゝには千六百年もかゝる。私は此の一年一人つゞ神に導く事によつて二十六年間に日本中を總て基督教になし得ると言ふ表を見る毎に慙愧に堪えぬ、神の愛に感激し十字架の血によりて救はれて居る我々信者が一年に一人も救はれぬと云ふ事があらふか、私共は此の標の裏に主に導かして頂き度いと願ふて居る人の名をかいて常に祈つて居るのであります。誰かの爲に常に神に祈つて居らぬ人は眞の信者でない。愛の神様を信じながら傍に未信者があつても知らぬ顔してる人は眞の信者ではない。もしあなた方が眞の信者ならあなた方は誰かの救の爲に祈らねばならぬ。あなた方の父母兄弟姉妹或は小學校時代の先生友達或は恩人等の爲にあなた方は常に祈つて入らつしやるでせうか。

第七。我々神の選民は世と戰ふて世を征服する者でなければならぬので御座います。神によつて働く者には神は必ず惠と勝利を與へて下さいます。神によれる働は必ず無益ではないので御座います。我々神によりて選まれて世に出て働く者は丁度外國に遣らるゝ大使の様な者であります。我々は種々の仕事を致しますけれども其は自己の意志を行ふのではなく、我々は代表者であつて其遣はしゝ者の旨を果すのであります。明治卅七八年の暮、日露の戰役も終つて、米國に排日問題が瀕に起つて來た頃、二人の基督者紳士が此の問題に就て論じながら日比谷から

電車に乘つた、所が車中に立派な樣子をした一人の男が居て、頗る鷹揚に自らの地位身分に誇つて居る樣子で、隨分亂暴な無作法な事をして居ました。二名の信者は見るに見兼ねて電車から飛び降り、そして二人が今が今まで心配して話合て居た問題の重なる理由の一は實に米國に眞に神を信ずる日本人の代表者がないと言ふ事だと思つて、二人は直に日比谷の俗にニレイ山とよばれる高い所に登つて聖書を披いて跪いて共に日本の前途の爲に熱涙を流して祈りました。軈て其中の一人が自分は今から總てを抛て米國に行く、そして一人でも日本人の中にも眞面目に神を信ずる者があると言ふ事を知らせたいと申しました。此の人こそ彼の奥江淸之助氏で其の友は本間氏であつたので御座います。後に奥江氏は總ての家財道具を賣り拂ふて終に米國に渡つて農業をして眞面目に日本人の爲に働いて居られたが、其中に奥江君が貸りて居た土地を返す期限が來て一萬圓の金がなければ折角此迄働いたのが無駄になると云ふ場合になりました。日延をして貰つて一生懸命に奔走したが其の日延の期限も切れて如何しても五千圓丈の金の都合がつかぬ、終に止むを得ず本間君の所へ五千圓調金依賴の電報を打つたのであります。本間君も自分の貧乏を知りながら此の電報を打つたのはよく〳〵大事の場合であらふとは思ひましたが此時本間君の手元には僅に三錢五厘きり金がなかつたといふ事であります。けれども本間君夫妻は日本の爲に眞の基督者となつて働いて居られる奥江君の爲に此れ丈の金子を與へて下さいと夫妻共に熱心に祈られた所へ丁度書留郵便で一萬圓の金子が屆きました。此は先年不良少年であつた息子を本間君に助けられた或母親が本間君にどうして御禮をしたらよいかと種々に考へて居ましたが急に一萬圓の御禮がしたくなつて送つて來たわけであつたといふので御座います。多くの場合人々は耶蘇にいやされた九人の癩病人の樣な場合が多いのであるが此の二人の夫妻の祈と至誠は神に通じて神は此の母を用ゐて主に歸

れる一人の癩病人となし給ふた事で御座いました。我々の心を見給ふ天の父は今も在はす、讃む可きかな。本間君は五千圓を要求されたのでありましたが直に一萬圓を其の儘手もつけずに送られたと言ふ事である、神は本間君と奥江君とを祝福し給ふて今は兩方共事業が其々盛になつて居ります。

神はあなた方一人一人を救ひまた此世に遣し給ふた、どうか神樣に身も靈も捧げて日本の爲に如何なる苦痛を厭はぬと言ふ樣な祈りで皆さまが一人一人神樣のまへに捧げ得られてやがて其れらの姉妹方が各自に其遣された所で人々に神の御救を述べ傳ふる事となつて日本に神の御名をほむる人が多く出來る樣になるならば此の大正三年の夏期修養會が後來に於て大切なる催しの一となるであらふと思ひます。また、自分はさう言ふ樣になる事を切望して祈る次第であります。（完）

實を結ぶ修養（つゞき）

吉野彦一

第二、そこで友として基督に選ばれ、使徒として立てられたる我等は奈何なる方法によりて實を結び又奈何なる種類の實を結ぶべきものでありませうか「汝等をして往きて實を結ばせ其實を存しめんが爲に我なんぢらを立てたり」と耶蘇は言われました先づ第一に姉妹方の御注意を促したいことは、耶蘇が「往け」と仰せられた事であります。原語を究べて見ますると單に「往け」との命令のみに非ずして「徃かざる可からず」との義務あることをも明かに教へてあるやうに思ひます。使徒等の徃くべき所は何處でありませうか。彼等は「イスラエルの家の迷へる羊」を尋ねて之を伴ひ來らんが爲にガリラヤの諸邑に遣はされたことがありました。あの時に耶蘇は「汝等異邦の途に往く勿れ又サマリヤ人の邑にも入る勿れ」と命じて活動の範圍を限られました。

是は如何なる理由に基くのであるか、多分弟子等の訓練の不十分なると「救は先づ猶太人に宜べ傳へられなければならぬ」といふ方針の二つの事に歸因するのでありませう。乍併今は二年有餘の間耶蘇と寢食を共にし耶蘇の語られたることを聽き、耶蘇の行されし事を親しく見、耶蘇の何人たるやを明かに學び悟つた彼等は更に廣大なる舞台に踏み出で丶救靈の大演劇を始めなければならないのであります。彼等はエルサレムより始めて地の極に至る迄基督の證人となるのであります。然し彼等の遣はさるべき世は惟に腐衰の上より觀た廣き世ではありません。傳道事業はあらゆる階級の靈魂を含まなければなりません。アグリッパ王の面前に證した彼の保羅はトロアスに於て名も知れざる一少年の生命を救くることを躊躇しなかつたのであります。今日基督は私共各自に命じて沖に出で丶網をうて、燈を桝の下に隱し置かずして家に入り來る凡ての者を輝さんが爲に燭台の上に置けと仰せ給ふのであります。我等にも保羅の如くマケドニヤ人の叫を耳にするときに蹶然起つて其貴き招請に應ずるの準備と勇氣とウヰリングネスはあるでせうか、我等の信仰生活は寄宿舍の狹き一室、校舍の一偶、若しくは我が家庭の一端に限られてはゐませんでせうか。我等は稍もすれば自己の救に滿足し、自己一人の平和を增進することを以て廣き世を愛し給ふ神に對する我が責任を完成せりと思惟するの傾向を有て居らぬでせうか。基督教青年會の標榜とする所は單に基督に對する信仰に止まらず此信仰を他の人々に傳ふるとあるのであります。換言すれば守成的であると同時に攻勢的でなければなりません。現時の我國の社會程眞の光と眞の鹽とを要するものは他にないと思ひます、而して光たり鹽たり、山上の邑たるの職責を全ふせんとするならば近代の一小說家の言ひし如く我等は基督の如く世界大の想像家となつて他人の悲痛、艱難、苦悶さへも眞に自己のものと同樣に想はなければなりません。更に進んで主耶蘇は「我を離れて往け」と命

じ給ふのであります。是迄の弟子等の事業は見習的性質のものでありました。福音書記者の一人は耶蘇が十二人を選ばれたる目的を記して曰く「己と偕に置きまた教を宣べ傳ふる爲に遣はし且つ病を醫し鬼を逐出すの權威を授けんが爲なり」(可三〇十四、十五)。耶蘇と偕に歩み、耶蘇と偕に語ることは是迄に於ける弟子等の日課でありました。然るに今や彼等は耶蘇をはなれ而も耶蘇が創められた神國擴張の大事業を繼續して行かなければなりません。使徒としての彼等の獨立傳道はこれより始まるのであります我等各自の修養に於て弟子等の取るべき此獨立運動より學ぶべきことは抑も何んでありませうか。其一つとして數ふべきことは抑も何んでありませうか。其一つとして數ふべきものは信仰の努力であると思ひます、私は之を名けて寧ろ信仰のエキソルサイス即ち練習と申したいのであります。弟子等の爲に捧げられた主耶蘇の最期の祈禱に明かに示してある如く、彼等は耶蘇の何處より來り又耶蘇の外に「永生の言を有てる者」は世にないことを認めて居りました。乍併耶蘇に對する此信仰の眞の値と能力は之を實社會に應用して始めて實現せらるゝのであります「此ほか別に救ある事なしそは天下の人の中に我等の依賴て救はるべき他の名を賜はざれば也」との使徒彼得の大膽なる證言は「汝は基督活ける神の子なり」との告白に比すれば、更に大なる能力あることは今こと新しく説明する迄でもありません。私共が修養に修養を積んで尙ほ實を結ぶに至らざる一の理由は唯受くるのみにして與ふることを十分練習せないからではありますまいか。米國アウトルック雜誌の主筆ライマン、アボット博士であつたと思ひます博士は嘗て「神の臨在の練習」と題する修養的聖話を誌上に掲載せられたことがありましたか、私は之を精讀して不尠自分の信仰生活を益する所がありました。私共は神の存在は無論神の不斷的臨在をも確認して居りまするが、此確認と信仰とを以て果して處世の途をとつて居るかと自問するならば、必ずや

思半に過ること多々あると思ひます。耶蘇より獨立して信仰の道の證するといふことは葡萄樹の枝を其幹より斫り離すといふ意味ではありません。耶蘇基督に於て有てる信仰と能力を實際に試みることを言ふのであります。今一つ實を結ぶ方法と關聯して考へたいことは犧牲の精神であります。彼の一人のギリシヤ人が主耶蘇に見えんことを弟子のピリポに願ひし時に、主は何と答へられましたか。「誠に實に汝等に告ん一粒の麥もし地に落て死なずば唯一にて存ん死は多の實を結ぶべしその生命を惜む者は之を喪ひ其生命を惜まざる者は之を存ちて永生に至るべし」(約十二〇二四、二五)と。得る爲に失ひ、生る爲に死し、他人を救ふ爲に自己を殺すといふ此の法則は自然界と超自然界の二つの世界に共通であるといふことを彼のドラモンド教授は廿有餘年前に主張されたのであります。彼は其著 The Ascent of Man に於て一の個體がどうしても個體として其生命を失ふに非れば二の新なる個體の發生を見ることが出來ないといふことを論證せられました。例へば單細胞の生物はある一定の大さに達しますと自ら分裂することによりて二個の單細胞となり、斯くして其生命を保存して行くのであります。二個の別動體に分るゝとき其生命を存ちしものは何んであるかと問ふならば、それはセルフ、サクリファイスに外ならないと、ドラモンド教授は答ふるのであります。再生作用或は生殖作用はルプチュア即ち分裂によりて始まるといふことは生物學上の一大原理であります。靈界、道德界に於ても同じことである。最高の生命は自己を棄て自己を殺すに非れば到達する事が出來ない、利己主義を破り、他愛主義の中に古き而も新しき我を再生せしむる事によりて眞の生命を得るのであります。愛は割愛によりて存たるゝより外に途がありません自己以外に他の物を探索めて之に全心全力を献ぐるは愛の固有性であります。耶蘇は「われ再び命を得んが爲に命を捐る」(約十〇十七)と云れましたが此に實を結ぶ秘訣は確に存して居ます。(未完)

出席の途中より

萬國基督教女子青年會へ

渡邊百合

五月卅一日愈船中です。昨日ニユーヨークを出帆いたしました今の處では船はあまりゆれません、一寸ニユーヨーク滯在の事を御きゝ下さい先づ廿八日に夕五時半ニペンスベ市ステーションにつきました。幸にマシウ樣が迎へて下され無事にレキシングトン町の青年會につきました、まあ立派な建物です事日本にあの四分一のものでもあつたらば……と思はずには居られませんでした。久々でマシウ樣に御目にかゝり嬉しう御座いました種々うかゞつたり話したり致し度う御座いましたが間もなく夕食、夕食の後には疲かれておりましたから入浴してねましたモーゼス樣は急にその日御出でになられなくなりましたが翌日御出の事とうかゞいました。

廿九日朝うつかりと支度をしておるとマシウ樣が朝食にむかへて下さいました其も其の筈時計をかへるのを忘れて居りましたので一時間のちがい大いそぎで食堂に參りました食後は皆で讃美歌一つうたい聖書にマシウ樣の御祈があゝりました。そのあとで私は髮を洗ひましたおかしいでせう學校出る前に洗ひました處水のせいで餅のやうにひッついて解かす事も出來ぬ程でしたから早々洗はせて頂きかわかせながら一寸いたづらをしておりました處へモーゼス樣御出でなり嬉しう御座いました三人で私の毛をかはかす爲めに十二階の屋根庭に參りましたら紐市がよく見はらされました、そこでいろ〳〵皆樣で私について相談、ありがたい事でせう荷物は入用の物丈にして小なトランクに入換へでしたが私がのろいので殆とつめて下さいました。御晝には一の宮氏の處に、私三人で招かれました領事の奥樣大堀奥樣なども御一緒でした其の歸へりには一寸用事をして青年會に歸り夕はまた日本の朝日と云ふ料理屋に日本料

理を御馳走されに參りました　鰻丼、吸物、鳥などいたゞきました。この日は種々なものにのりました自動車、電車、地下鐵道、乘合自働車の頂上等でかれこれ十時に歸りました。

　卅日朝まだ支度が出來ない處へモーゼス樣御出になりのこつて居るものをつめて出かけの用意を手傳つて下さいました。朝食後すぐに出かけました、私のおもい荷をもたれて何から何までの御世話波止場で船が出るまで送つて下さいましたマシウ樣も私の爲めに走りまわつて下されゆる〳〵と御話しをするつもりでしたのに時がなくて殘念でたまりませんでした、一寸位話する時はあつてもおちついて話します時がなかつたのです。私共の一行はミスマーサー、と外に四人よく名をまだ覺えません一人はロシヤの方とかよい方です皆また元氣です船に醉いそうにも見えません皆今は甲板の長椅子に毛布にくるまさつておられます私は手紙をかく室にこれを書いてゐます。

　今日は六月五日明日は此の船がプリマスに入港致ます。上陸は出來ませんが手紙は出せます、もう此の二三日一人で隨分考へました自然と考へたくなりますのです、グズ〳〵として居る人は氣の毒ですね神を信じて居る私共はどんな事があつても樂しく出來ない譯は決してありませんね。あゝこの頃の美しさ、日本の友人方とながめたいのです。海上程廣大無邊を感ぜしむる景色がありませうか、海も空もはてしがなくみえるのですもの、夕日の美はしさ何ともいへません。時々夕食事に早く甲板に出て入日をながめます、また此頃は一寸月夜です、何とも云へません。

　六月十七日にはスタックホームで日本の青年會について一寸十分程話すのです私よく存じませんから材料をミス、マシウから頂戴して來ました。

　二伸　何れ會の模樣や其外のくはしい事は後から認めまして送るつもりです、今日は手紙を出す機會がありますので、僅に途中から右まで申上ます。

所感

山邊秀

新聞紙上に米國が講和調停を英國及獨佛露國に申込んだと度々掲載されて居ります、諸新聞の評する如くこは愚なる事が或は生意氣な事かそれらは私共の知る處ではありません、たゞ一等國中平和主義を今日唱へて居りますものは合衆國のみである事を忘れてはなりません、此主義に擧國一致を唱へて居る事を注意すべき事で御座います、彼の國の如き雑居國に於て一朝戰爭等に味方しましたなら今日の世界の狀態は猶ほ悲慘なものでありませう、彼の國のみ先づ中立を守つて居る事を私共は感謝に堪えません一友人が米國より歸朝して左の事を申しました「私が米國で寄寓して居りました家の主人は露西亞人で妻君は獨逸人で彼等の兄弟は自國にての士官にて出征して居るそうであります、此家の隣りに獨逸軍人が居りますが何れも皆日本人なる私に對して親切で出立の際など皆見送りくれました、なほもし大平洋に於て獨逸艦に捕獲さるゝ事あらば打電せよ直ちに免除さるゝ樣に工夫せんとまで親切に士官は云ふて呉れました。米國に居てなほ此戰爭のあるべからざる事個人〳〵としてはだれも戰爭を望み居らぬ事を深く感じて早く平和の來る樣にと祈つて居ります。

雑誌アウトルックの報じます處に依りますと米國の主なる都會には非戰爭黨が組織され講演、路傍等に於て戰爭廢止演説が度々催うさるゝそうで御座います、其聽衆はもとより歐羅巴全國の者が代表されて居りますので何れも赤誠戰爭を厭ふ意味の雄辨を吐いて居ります、群衆は大喝采であります。世界より觀れば多少非難は勿論ありますとはいへ確かに世界の平和主義の幾分かにても實現されて居るのは彼の國と存じます。

一事をなしますにも我等は神の助によると口癖に申しますが我等は謙つて神の援助を乞ふて居るか或は神をして吾が助をせしむるといふ如き態度ではな

いかと疑ふ事があります、獨逸皇帝の今回の開戰に方り將士を勵ました詞に「汝等は恐るゝなかれ神は古より獨逸國民を祝福し吾等の味方にましませしを我祖先エレクトーの時より連戰連勝未だ敗をとらざる獨逸軍に神は常に味方なし給ふを記えよ」と申されたそうであります、丁度米國南北戰爭の際或人が時の大統領リンコルンに問ふて卿は神が吾黨の側に味方しますと信ずるやと尋ねましたら我は其を知らず只吾黨が神に味方し居らん事を願ふと返事したそうで御座います、處が日本の某田舍で人々の戰爭談を聽いてゐますと物識顏の一人がいと傲然と「なに外國など日本と戰爭したとて勝つものか、日本では神々が出征されて皇國のために戰はれるのだもの」と以上三條の比較は私共を大に教訓するものでありませんか。

好友園參觀の記

河口正子

去る二十一日小石川なる好友園を訪問いたしました。午前九時から始まると云ふに小供等は早八時頃から集　皆無邪氣に樂しげに遊んで居ります。然し餘り早くから來て居るので流石に遊びに飽きて九時少し前には未だ始業を告ぐる鐘も鳴らぬに、もう皆列を正して「先生未だ時間ではありませんか」と頻りに催促をする。愈々始業時間が參りました――小供等は喜び勇んでマーチに合せ行儀よく教室に入り、楕圓形に列べてある小さい可愛らしい椅子に各自腰を掛けました。

先づ第一に始まつたのは朝の祈禱の歌で、皆瞑目して態度を正し靜かな音樂につれて祈の歌を唱ふ樣は實に天使の群ではあるまいかと疑はれる程でありました。直ぐ其の後で祈禱の間に少し騷がしかつた子供が三人、先生に呼ばれて別室に行きました、多分小言を云はれたのでせう。それが大變溫順しくたつて歸て來ますと、こんどは「先生御早う」の挨拶の歌がありまして、それから先生は生徒の名簿を讀上られました。皆が優しい聲で「ハイ」とお返事をする樣が又實に可愛らしい。加之その間の靜肅な事――御茶の水等の幼稚園であれば不思議では御座いますまいが、概して下等社會の兒童のみが來て居るこの幼稚園の子供にして、而も創立以來日尚淺きに斯くまで靜肅であるのは確かに保姆たる先生方の御骨折によると感じ入りました。

此幼稚園では生徒の指導者であり又先生の助手である組長の樣な者があります。これを大將と名けて每日更代で務めます。其の大將になる可き者は行儀のよい溫順しい家にあつても父母に從順で善良な子供でなければなりません。是れは前日の大將と先生との相談の結果選ばれるので、其の大將が定められた候補者の前に行き御辭儀をします、するとその辭儀をせられた子供は大將になつて先の大將

と代り合つて全生徒の先頭に座るのであります。この大將が席につけば先生は其子供の秀れた處を擧げて「皆さん賞讃て上げましよう」と云へば一同可愛いらしい手を以て拍手しました、大將の選擧が終れば黑板に書いてある日割中の今日の處に印を付けさせます、元より子供達は字を讀む事は出來ませんがその前日に付けた處をよく注意して記臆して置きさへすれば直ぐに付けられるのであります、此日は先づ新大將が命ぜられましたが不注意だつたと見へて違ひました、次の子供も同じで第三度目にお辭儀をせられた子供が正しく付ける事が出來ましたので皆はこの子供を賞讃拍手しました。(當園では他の子供に讓る時には必ずその子供の前に行き御辭儀をする事になつて居ります」これも終れば先生は唱歌なり遊戯なりを大將の好みに應じて撰ばせます、三つ四つの唱歌の後一先づ休憩になりました。この時にも大將が御辭儀をした子供即ち行儀よく溫順しい子供の椅子をもつて立ちました。行儀惡しく又騷がしければ後まで殘されるので皆同然に行儀よく靜かにして、お辭儀をせられるのを待つて居る。之が又愛らしい。休憩時間は十分餘で其の間子供達の案内を受けて畑を見に行きました。皆の子供が始めて逢つた私を憚る樣子は少しもなく「先生、先生 」と呼び袖や手にぶらさがり「これは私達が蒔いた唐茄子です、これは茄子です」などと一つ〳〵說明するのが實に無邪氣で愛らしい。休暇前に蒔たと云ふ大角豆、トマトーなども多く出來て綺麗な實が生つて居りました。又鷄頭花やえぞ菊朝顔などが愛らしく咲いて居るのが子供達の樣子を示して居る樣に思はれました。やがて一同は列を正して其の敎室に入りました一の組は永野先生。二の組は大槻先生で、先生の御話によればこの學期の心理は識別と云ふ事で、果物草木等によりこれを敎へる。この週は果物で、火曜日にそれに付いて御話をし、金曜日にこの心理を含んだ關連した聖書よりの話をするので、昨日はイブの話をしました今日はその復習であるとの事でありました。然し子供等は御話が好きでありますから喧騷な時などはその罰として御話をやめるのださうで御座います。一の組では其課程の粘土細工を始める前に野菜類の實物を見てその名を答へる復習がありました。そして出來た人は皆賞讃を受けました。二の組の科程は圓體や立方體の復習でありましたが、皆圓體さん、立方體さんと人に譬へて敎へて居られたのが大變子供等の興味を引いて居る樣に思はれました。三四十分の後、また元の樣に合併し暫時遊戯をなし後に「先生さよなら」の別れの歌を唱つてその日の課業は終りました。子供達が歸る時も自分の椅子を行儀よく片付けて行く樣子の內にも行き屆いた訓練があらはれて實に床しく思はれました。その日は土曜日でありました爲半日で終りましたが他の日は午後二時半まで午後は御晝寢又は自由遊戯で費すそうで御座います。因にこの幼稚園は四十五人を定員としてありますが每日の出席者は四十人平均であります、今學期は子供達が大變馴れて全體に幼稚園と親みこれを自分の物の樣に思ふ樣になつて來たさうで誠に感謝に堪えぬ次第であります。

修養會所感

(三)

廣島縣 川上廣子

修養會にて私はどの位神樣の御惠を深く感じましたが人に申事の出來ない程で御座います、是より神樣の御爲に此身を献けて働く積で御座います、然し私の働て居る所は大變基督敎に反對な土地で有ます、何卒瀨田と申す處の爲にも御祈り下さいまし。

小説 ひとりぼつち後篇

河井道子譯

第五章　煉瓦館

程經てストワード夫人と二人の娘はかの煉瓦造の大家に招待かれてラ氏と同車で參りました。平日になく靜なので、一同に謔笑れましたベテーは舌こそ靜かなれ眼の活動は甚しく、兩側に見渡すばかりの廣々とした、芝生を圍むだ森然したる栗の並樹路を馬車が這入て行く時は、邸內の植木花壇に一々注目して居りました、彼女は此館と其主人公とに何ゆゑか氣が引かされて、常々忘れ兼ねて居たのであります。今始めて熟視する此家の建築は中世紀風の觀樓や破風あり、長い窓扉に古色の外壁、何から何までベテーの氣に入りました。主人ヂエランドは兩側に雄々しき獵犬を伴れて玄關で來客を歡迎です。其の風彩如何にも泰然、しかも元氣よく、苦勞心配の影だにありません。此樣子を羞ひつゝ瞥見た處女は過日の出來事は夢かしらと疑ひ出しました。今一行の這入つた大扣室は骨董品で充滿しては居ますが又住み心地のよさそうな感をもざせます。彪牛兒苗や紫陽花の大鉢幾個かが室內を陽氣にさせて、梯子段の上れる彩色硝子よりさしくる日光は晴々した空を告げてゐます、客室は稍々硬苦しき儀式張つた裝飾で壁には高貴な油繪や陶器が掛けてあり四ッの窓よりは茂木多き庭園小丘が一眼に見渡されます。主客共に樂しく中食をしました食堂は見事な木目を見せた樫で張つてあり、壁には先祖歷代の肖像が列をなして居ります。

ヂエランドは客の歎待が上手で二人の娘は彼と母との會話を興味がつて聽てゐました、食後書齋に案內しますと、ス夫人は棚又棚なる珍書寶籍に餘念もありません。主人は娘達にむかい、

『此處が私の何時も居る場所で此部屋さへあれば私は一生滿足で御座います。』

其聲を聞きつけ、

『書物の中に住めば寂寥の念は起りません』
と手にせし書物の上からス夫人が合槌を打ちます、
『併しそれは一方に偏いた友誼です』と頓狂なベテーは申出します。『本は私に話しますが私が本に話す事は出來やしません。私などは話相手が欲いですわ』
『貴兄は嘸で御淋しい思を遊はず事が御座いませんか』
とマレーに問はれて、
『未だ其の經驗を致しません』
と皮素紙の數卷を愛撫て申しましたが俄かに彼の顔に一種の雲がかゝり、
『此の書齋は私の生命の一部とも申程で私は餘り愛着し過ぎたでしよう。學校時代の私は家族の謎になつて居ました。それと申すも祭日に倫敦の從兄弟の許に遊びに行くよりは此部屋で過したがつたのですから。併し此部屋で過す事の出來る丈其機會を利用したことを今後感謝を以て思ひ起すでしよう』
彼の音調には眞面目と感情とが如何にも意味ありげにベテーに聞えました。
母と主人とが書籍に餘念なきまゝに、ベテーは室内を徐歩して色々と觀察をしてゐますと一疋の獵犬が御供をして來ました、優しく手を犬の頭に載せて聲静かに囁き、
『お前は何か知つて居るのかね、御主人が煩悶んで居られる時に御側に居た事があるかい。お前は御手の處に鼻を擦りつけて愛と忠心とを御告げ申し上るかね？』
フロイと云ふ此犬は鋭敏い眼をベテーに上げて返答に只尾を振るのみでした、ベテーは窓際にゆき廣々したる芝生や欝蒼たる巨木大樹の後方に草を樂しむ牛羊の景色と、倚子、長倚子、机や卓と萬事整頓したる此の書齋とを見交して、
『私が此の家の女主人になれたら何程嬉しいでしよう』と呆然と云ひ出しました。
ス夫人は吃驚して娘を睇視ますと、主人は哄笑し『何の室を御本陣になさいますか』と問ひますと、

ベテーは自分の發言に別に何の不思議のあるとも氣付かず、前と同じ調子で、

『何の部屋も悉皆使ひませうが自分が靜止したり善い者になり度い時には此處に參りません』

ス夫人は立ち起り、

『餘り貴所の時間を徒費ましては濟みません。サー家中を御見せ下さいます御言葉に甘へて是から御願ひ致しましようか、實に此書齋は御美しいものです私も娘の申ます樣に自分の所有ならば此處で一日の大部を逘りませう』

主人は二階の音樂堂に客を案內してベテーを見ながら『多分貴女は此部屋に陣取りをなさると思ひますが』

『然、マー何と立派なピヤノでしよふ、一寸彈て見てよう御座いますか？　しかし私はヲルガンの方が所好ですが！　アラ彼處に一臺御座いますのね！』

『母が死去なりましてから誰も觸たことがありません、多分調子が狂うて居りましよう、御彈きなさいませんか』ベテーは頭を振りて後退り、

『否、否、勿體ない、不敬になります、誰にも御觸らせなさらぬ樣に遊ばせ、御母公は音樂好で入らつしやいましたか』

『大の所好で私に其性質を授けてくれましたが、彈奏く能力は與へてくれませんでした』

『其で結構で御座います、賞讃の出來る者は却て才能技倆ある者より、他人を幸福にする事が出來ます天才は兎角高慢に陷り。要求が貴族的になり易いものです』とス夫人が辨解してくれますのを聞たか聞かぬか紳士は獨言の樣に、

『世は天才よりも遙に同情と感恩の芳志とを僅かなりとも切望して居ります』

故吉田梅子姉の一週年に

松　榮　子

友逝きしかなしみ載するつきと日の
めぐりてはやも一年を經ぬ。

わがむねに死が投げつけしくろき影
うすまりもせで一年を經る。

いくさをば知らぬ聖國へ召されしを
われうらやむときみ知るらむか。

祈りあひし友のひとりの逝きしより
地のさびしさはまさりぬるかな。

月あかき夜としもなればことさらに
ともにかたりしきみなきが憂き。

きみがかげなほけさやかのわが胸に
このさびしさはいつか入りけむ。

み墓べにはなをさしつつうつくしう
寫生などせしきみをしおもふ。

魂はみくにに

魂は聖國に　常住みて
幸に滿つると　知れれども
秋風ふけば　しかすがに
しら露むすび　虫しげき
み墓しのぶよ　地の子は

修養會所感

（四）

東京　坂本ひさ

修養會の一週間は私にとりて忘れられぬ尊い記憶で御座います、如何しても信者の御仲間入をさせて戴きます、父が反對致しますかどうか存知ませんが只今は國に歸て居りますので何も相談は致しません、けれ共信仰さへ有つたなら必然許してくれると信じて居ます、何でも親に對して善良なる娘、弟妹に對しては優い姉でありたいと努力して居りますが惡い事ばかり致して困ります。何卒少しづゝでも日毎に信仰を與られ力を授けられたいと祈つて居ります、外村先生の聖書の組の筆記は誠に整ひませんで濟みませんが一生懸命に致しましたので御座います、何れ淸書して御目にかけます、私の生地は岡山で備前の夕なぎと申ほど夜は風がなく蒸暑う御座います、東京は夕風が涼いのでもう何處へも行きたいとは思ひません。

本欄はマクドナルド女史の馬可傳研究の續稿を掲載する筈にて原稿も出來上つて居たのでありますが、本會の夏期修養會で聖書の組の一組を擔任して下さつた外村先生の基督教一斑は捨て難い有益なものであつたといふので態々其大要を筆記して御送り下さいました方がありますから其を以て二三回本欄を埋める事に致しました。（記者）

基督教一斑

傳道義會主任　外村義郎

第一回　宗教とは何ぞや並に基督教の大意（參照詩篇百篇）

今より四年半ほど前に、二月より四月まで、東京から山陽道●九州●朝鮮の方を巡回した事があります。其折大變不思議に思つたのは、多年信者であつた多くの人が、今更の如く御惠を悟つて、非常に喜んで手紙を下さつた事であつた。かやうにこの教を知識的にはよく承知しつゝ、實際的にそれが生命となつて居らずして頭だけの信者も多いのです、さういふ風では信者たる眞の妙味を味ふ事はできませんこれでは丁度繪にかいた菓子の樣です。ですから今回の私の話も、知識的にはせずして、主に私の信仰的實驗をお話したいと思ひます。

第一に、「宗教とは何ぞや」といふことが肝要な問題です、この問に對する答はまことにむづかしく、昔から學者達の樣々な說もありますが、しかし平つたく廣い意味からいへば、「人と人以上のものとの關係」といへばよろしい。そしてそれは人格的關係であります。もつとわかりやすくいへば、「人と人以上のものとの關係を正しくするの」が宗教なのであります。同時に人と人との關係を正しくするものは道德でありまする。人といふものは、人間としては親に孝を盡し、臣民としては君に忠を盡さねばならぬが、それと同じく人は人以上のものを拜し仕へ愛しなければならぬ。これはもう當然の事であるから、一體人以上のものを信ずべきや否やといふやうな問は出される筈のものではない。誰も親に孝なるべき

や否やといふやうな問は出される筈のものではない誰も親に孝なるべきや否やといふ人はないと同じである。然るに多くの人々は大變に考違へをしてをる即ち宗教は安心立命、人格修養の方便手段に過ぎぬと思つてをるが、これは大いなる誤である。若し親に孝を盡すは名譽を得るためだと云ふ人があらば非常な間違である。孝は道なので名のためにするものではない。宗教の事もこれと同じで、何も安心立命の方便とならずとも當然の道なのである。しかし勿論人以上のものに仕へれば自然に安心立命も得られ又人格も高くなるのである。決して此本末をあやまつてはならない。

さて人は皆生來宗教心を持つてゐる。宗教心とは何かしら崇めたい又信賴したいといふ心である。人に本來この心があるからには、何かこれに應じこの心を滿足させるものがなければならぬ、渇けば水があり、飢ゆれば糧があると同じに、すでに宗教心があるからには必ず何處かに敬はれるものがなければならない。さうであるのに、何故多くの人に於て宗教心が發達しないかと考へて見るのに、それは發達しないのでなくさせないのである。數年前深川へ行つて話をした時、岡山孤兒院長故石井十次氏の事を話した所が、後で四十ばかりの婦人が、「その石井さんといふ方は、そんなに子供の世話をなすつてどうなさるのです、男の子は奉公にやり、女の子は藝妓にでもなさるのですか」と尋ねた時には實に驚きましたが、それからそこにゐた人達から、色々その婦人の事を聞いて同情に堪へなくなりました。其婦人は高利貸の一人娘で兩親は早くなくなり、今は女ながらも自分が高利貸をしてゐるのださうです。そこでその心には利子と金の事のみ充ちてゐて、宗教心などはとんともう無なつてゐる。實に同情すべき人と思ひました。又學者連中には科學萬能を信じて宗教心などは發達させないで居る人も多い、或時小學教員三十名許りに話した折に、或校長が「神の存在を科學的に說明して下さるなら、何時でも信じます」

と云はれた。これは誠に矛盾した問ですが私はかう答へた。「若し母の眼から出る涙を分析して、恩愛の分子を出す事ができるなら私もお尋ねに對へやう」と。かういふ風に世には宗教心を發達させないでゐる人が澤山ある。

さて健全な道徳を養ふには、健全な宗教の上に道徳を建てなければならない。所でその宗教も色々あるが、三大宗教といへば佛教、回教、基督教の三つである。他の宗教の事はお話できませんが、その中の基督教は「キリストなる人格を媒介として人と神との關係を正しくするもの」である。「我はキリストによりて神を愛し又キリストによりて神に愛せらる」るのが基督教である。この宗教を淺薄窮屈なものと考へる人が多く、信者といふ名を有しつゝもかういふ風に考へる人もある。これはこの教の眞髓を得てゐないからである。或時一休禪師が炎天に笠なしで歩いてゐた所が、通りかゝつた一人の僧が氣の毒に思ひ自分の笠を與へた。すると一休はその笠を受取らないで、「わしはちやんとかぶつてゐる。わしの笠は青天井だ」と對へた。件の僧は生意氣な奴と思つて、一つ懲らしてやらうとその夜一休を自分の所に呼付けた。そして「笠をかぶつて家に這入るとは無禮であらう」と一喝すると、一休言下に對へて曰く「實は脱ぎたいが置場が無いので」と。實に面白い。禪宗でもこれ程妙味がある。況して神と人とが一致契合する此基督教は廣いものである。極めて廣い極めて自由な宗教である、尚強くいへば多くの基督教信者が思つてゐる以上に廣いものであるといふ事を、私は實驗上から斷言致します。

修養會所感

（五）

東京　寺田初代
　　　高野重代

いとも樂しき會合の一員として一週間を美しき地に過ごし候さへ中々に忘れ難きを況して結構なる御話を多くの先生方より御懇切に承り候此上もなく嬉しく永く忘れまじく御禮申上候、過去久しき年月霞を隔てゝ見し月の樣覺し事も明かと相成心に固く決する事も出來申候、今更に此修養會　私共二人の前途に一大革命を生ずるの機會とも相成申べく返す〴〵も厚く御禮申上候。

夏休の經驗

【其一】御飯炊

伊豆　常盤まつ

扨私事暑中休暇後は保證人の家に參り世話に相成り候處先方にては親切に申くれ候へども、

暑中休暇中は、何か適當なる職業を見出し、親や親類に厄介かけぬ樣にと考へ居り候間、これも經驗と一と思ひ七月下旬商人の家に女中として奉公いたし候て主人方避暑の御供を致して當地伊東に參り居る樣な次第に御座候、當所は溫泉場として又海水浴場として最もよき場所とて只今にては避暑客を以て非常なる賑に御座候、然し何分にも奉公の身の上に候間當地に參り候てより二十日程に相成候へ共家より一丁目距りたる伊豆の海岸を未だ一度も見ざる樣な次第に御座候。扨當家の家内は主人御夫婦に隱居樣に孃樣（四歲）坊樣（三歲）弟坊樣（二歲）中學四年程なる主人の御舍弟樣と中働き女三人、庭男三人と私とにて都合十三人に御座候。私は此人達の御飯役に御座候、殊に二升だきの釜に御座候間、一日に少なくとも四度の御飯炊きにて大抵每日五度炊く事に相成り居り候、其の間に臺所の御掃除、汚れし食器洗ひなど、隨分忙しく御座候。朝四時半の起床より夜湯殿を私と他の庭男とにて洗ひ終るのが早き時は十時少し後るれば十時半まで御飯の時の他一度もたすきと裾からげを下し候事は無之候、幸ひ此の二三日中は當地は大雨に有之候間、晴天の日程の勞は當分無之候。雨後晴天には每夕庭の植物にバケツに百二三十杯の水をやるのも隨分骨折に御座候、され共最も感謝に堪へず候事は、身體强壯なる事に御座候。始めの程は馴れぬ仕事の事とて骨がぼき〱云ふ程、疲勞いたし候處、此頃にてはぴん〱して働き居り候。時々皆の者が最も恐れ居る隱居樣即ち大奥樣なる人勝手に出てられ色々と大聲にて申され候時には只胸がどき〱いたし候てまご〱うろつき候ては「何をして居るのだ、そうではないぞ、仕樣のない奴だなあ」と申され候、然しこれは餘り氣にも止めず候へども、只々殘念に御座候は讀書の時間の無之事に御座候、睡眠時間五時間半から勉强時間をさき候ては到底身體つゞき申さず候。さりとて皆樣歸國遊ばされ多くのよき書物御讀みあそばされ秋よりは益々御進步遊ばすならんにと、考へ候ては實に悲しく候へども素より皆樣とは違ふ私の境遇と諦め居り候、「日々の力」は每夜就寢前三十分程讀み居り候。冬着の洗濯物又は縫物なども東京に預けあり候間それ等も學校の始まる前に整理いたし度と存じ候へば九月早々歸京の積りに御座候。

【其二】生活難

稲井　江見　勝代

暑中休暇の田舍の事ども少しばかり書き列ねます、丁度歸省した頃稻は本當に小さう御座いましたがもう美しい穗が出て居ます、今年は戰の御蔭で百姓は本當に困りました、私の地方は養蠶の隨分盛んな處で御座いまして春夏秋の三回に、百五十圓もあげる家は普通位で御座いますのに、今年は貿易の止まつた爲などで、夏蠶などは少しも賣れませず、誠に安くて漸と賣つた樣なこと、御茶も出來は甚だ宜しう御座いましたが、賣れないので困つて居ます、其の他農家から來ますものは皆安くてマッチ肥料などは非常に上り、本當に汗水たらして小言一つ云はないで、不味なものを食して働いて居る人が本當に氣の毒で御座いました。然し米は誠に好く出來まして今頃は稗などとり去りながら誰も〱喜んでに

こ〳〵して居ます。それを見ると私はうれしくて耐りませんでした。私も昨年は蠶を飼ひましたそして御金を拾二圓ばかりとりました又畑になど度々出て隨分働きまして色々農を致しましたが、今年は少し家を建て直したりして家が忙しかつたもので御座いますから農の方には少しも手を出す暇がありませんでした。けれ共色々家の事どもが分かりました、山にも度々參りました昨年も今年も萱刈る男について行きました。もう谷と谷との間の一尺許りの處にまで小さな水田が出來てゐます。そんなに致しましても經濟がやり切れない様です、私は東京などの人が皆立派な様子をして居られるのが不思議なやうな心地が致しました。鑛山なんかも銅は全く駄目のやうで御座います、人夫にやる賃錢だけしか價がないとか云つて居ました。普通の山即ち松林とか杉林のやうなものは段々かり盡されてしまいました、四方の山が皆禿げて居ます。私はこれから農家はどうして行くかと思ひます。隨分苦しいだらうと思ひます、殖林をいたしましてもそれが餘り好成續でない様で御座います。農業は本當に樂いが又苦しい仕事と思ひます。牛なども可なり居ますけれど前にも申ましたやうに谷と谷との間まで田の様ですから、なか〳〵養ふに困難なやうで御座います。其の上にまだ田舎人の金錢を取るために都會から僞の品物をうり込む人が澤山やつて參りまして欺いて仕方が御座いません、どこまでも此の様なものでしようか、田舎に居りましても何も別に變つた事が御座いませんからたゞつまらない事どもを申しました、私はもつと色々の方面に知識が御座いまして人情などが良く解り人を悦ばせ勵ますことが出來るやうな人間になり度う御座います。自分は幸福だと存じます、兄妹三人も學校に入れて貰つて色々教育して貰はれることを感謝せずには居られませぬ。

【其三】

感謝の夏

新潟　上野　とし

あんなに聖い〳〵一週間を大津で送る事の出來ました事は、感謝の外御座いません。修養會中にいつも夜の組會の後て、外で祈りました時只感謝の涙に溢れた事は屢々て御座いました、身にあまる幸何して宜しいか、只友の爲め、神を知らざる人々の爲眞の同情を持て眞に祈りつくさてはと今迄の眠より醒めて、泣いて約束いたしました、是迄私の友に對する祈同情には義務的の何かゞひそんで居りましたけれども、其の聖い修養會により鞭打たれ目を開く事が出來ました事を御喜び下さいまし。幾度か岸邊の砂上に伏して感謝し泣いたか知れません。偉大なる神の作り給ひし大洋の前に伏しました時、自分の小さい〳〵事が能く分り心の底まで洗はる心地がいたしました、今迄自分の心の奥底にひそみ居りました『ほこり』よし人に見えずとも自分の自の開かざりし爲め今迄見ざりし『利己心』凡て目の前になげ出されました。そして主の大なる御力によりてぬき去られた感じが致します。幾年か苦しめました奥底のものがすべてなくなりませんでも分量が少なくなりましたのでうれしくて〳〵感謝せずに居られません。八月三日に歸宅いたしましてより日々樂しき聖い感謝に滿ちた生活を續て居ります、いつも家に歸れば樂しく面白く喜ばしいので御座いますが、いつものそれに一層云ふ事の出來得ぬ何か慰めがありまして例年より少ない休みに仕事を倍もいたし、平和なる樂しい休を送りました事また御力による事であります、家ではいつも亡母の代りを致しました姉が分家致しました爲め父弟女中一人と私の四人で例年の休暇に比すれば淋しい筈でありま

す、また私の現在の學校の事よりも一番に苦しい休てあるので御座いませう、其の休を一番樂しく一番聖く幸多く、實あるものとなし下さいました事、主の御力、次の祈によらざれば出來得ぬ事と感謝して居ります。當地は靜かで涼しくそれに家は少人數で御座いますから、晝に祈り考へ、聖書の組の方々や、修養會にまひられし方々、又道を求めて御出の方々に充分ならずとも御便りする事も出來きまた靜かに、自分に歸つて伏して祈る事も出來ました。教會(新潟)にも一度拔にして皆參る事が出來ました。學校に於ける私の失敗や、苦しみを耳にしたる友は色々と慰たり親切なる手紙を送りました、そして心配してくれましたが私の幸多き感謝に滿ちて居るこの休みの事をきゝ、不思議に思つて居ります

　當村は新潟を去る二里半にて佛教の盛な所てキリスト教のキの字も知らぬ人のみて少々物の分る人々は大の反對て誠に頑固な所てあります、一村少くて二十戸の小村、四十戸位の村が四十八ケ村にて島屋野村と云ふ一村をなして居るのでありますが昨年まて信者は其大きい村に只一人てありました、男子の方が二人ばかりあるとか聞いて居りましたがどの字やら少しも存じませんてした、神樣はどんな處でも捨て給はず、どんな荒地にも種を蒔き給ふ事を深く感じました、八月十二日の日曜日は日本基督教會に參りましたら先週見えなかつた人が多く居りました、其の中に女學校時代に一級上なりし同村の方が見え、私より御挨拶いたさんとせしに早く呼掛られ嬉しく色々御話しいたして翌日一里半の村道を歩いて初めてなるに親しい友の許に行くが如くまゐりました、私には何よりの友てした。この方は卒業後奈良高師へ入學され三年目に病氣にて退學され、札幌の農科大學卒業の兄上樣の御導きにてかゝる幸を得られたさうで家は昔風の村ても名高いので御座いますが、兄上と二人て新潟の日本基督教會に脇して居られます。農學士の方は靜岡地方の農學校に奉職して居られるさうで御座います。

　女學校時代はよくも御話いたしませんてしたが訪問して長く〳〵交つた友よりも心ゆくばかり御話いたしました。實に同じ主の御前にあるものゝ幸は不思議て御座います、一ケ月に二度か一度位しか教會に參られぬ由靑年界を紹介いたしましたら大變に喜んて居られました、御内が嚴しいので思ふ樣に讀書も出來ず兄上といつも夕食後讚美する事と御祈りする事が最上の樂しみと申して居られました、村の子供を集めたいけれど嚴父の許しが出ぬから如何しませうと悲しみて居られました、實に熱心な方て澤山に教へられて歸りました、兄上も歸省中て組合教會て誠に有益な御話をせられました、本當に力が與へられ村の爲めに二人て致ませうと約束しました私の内は自由てすから此休に歸るとすぐ子供を集めて少しつゝても神樣の事を教へ樣と始めました、中々能く聞いてくれますので休暇のなくなりますのが殘念て御座います、晦夜に燈火と申しますけれども、あの時の私の喜感謝はとても書き表せません。學校に居りますと同じ空氣の中て御座いますから、惠になれて感じませんが歸りますと何もかも感謝て御座います朝早くから夕後くまて暑さもいとはず田の中に働く若い娘等を見ますと只涙で御座います。自分の幸の百分の一も持たず神の惠も知らずほんとに堪えられなくなります、何してよいか。數限りも知れない百姓から仕へてゐる下男下女娘等に至るまて、又は少なくとも一小村でもこれが爲に盡すのは、私共先に選ばれた二人のつとめて御座います、何しても小さい集が開かれる位になります樣皆樣の御祈のはしに御加へ下さいまし。

　八月二十一日の夜、植村先生が佐渡に御渡

りの途中教會で御話がありました、この時こそ日頃の願を果さんと兄や姉に前週から頼み置き友達にも知らせて友達は一人しか參りませんでしたが姉を始めて教會に導く事が出來ました、先生の御話はいつもより易すく良く分り姉はこの後教會に參る樣申して居りました。姉の家から四五丁で御座いますからこの機を失はぬ樣にと祈つて居ります、四歲になる小供が教會の讃美歌が好きで母に迫まります、兄が時々連て行くものですから「再び主エスの下ります日」など大好きで私に敎へてと申ます。私の小學校の十一　位の時の友達がいつも歸ると尋ねてまゐります今年も七里もあるのに參り色々御話して川頃伺ひました御話や修養會にありし事どもを語りましたら非常に喜び、小學校の先生をいたして居りますので御話伺ふ折がない事を悲しんで居ります。今年の二月から「女子青年界」により大いに慰めを得て居ると感謝して居りました。田舎に歸りてはじめて讃美歌の「つゞ浦のあまたの子等御文よまねば神を知らず」の眞を見る事が出來斷らずには居られません、一人私の友達で毎夕の樣に私が信者である事を責めに來る人があります、今日まゐりますと五日になります。色々の例を持つて私に怒て說明いたします、私は何も辯解する事を知りませんし、實行も出來ません弱い者て御座いますから、何も申さず毎日友の云ふ事を聞いて只祈つて居ります。熱心に祈つて友の來ます頃いつも夕方の祈の時で讃美したり御祈りしたりして居るので御座います、其の時を覺えてわざ〳〵其の時に參ります、熱心に私に進めます私は熱心に友の心の爲め祈つて居ります。いつか主の御聲がある事といつも喜て友の訪問を受けて居ります。

【其四】

佛教講習會

東京　井上　千歲

今夏は大津に於けるかの有益なる又樂しき修養會につらなる事叶はざりしを殘念に存じ居り候處鹽原に避暑中、圖らずも同地に開かれし佛教禪宗臨済宗の夏期講習會これあり其方に出席いたし候事を得感謝いたし候。

此の會は八月十日より一週間、風は誠に涼しく得も云はれぬ美しく又偉大なる自然の景に包まれたる妙雲寺内に開かれ申候、講話は佛教の大意其他種々なる御經の講義などにて候ひき信者の生活の一斑をも見る事を得候て聊かなりとも、耶蘇基督の御教へを聞き、之を信し居り候身にとりては兩者を比較し種々なる差異を見出し得候て、更に面白き、又有益なる七日間を送り申候。また此の比較によりてます〳〵基督教の勝れる事を實に深く〳〵感ぜられ申候。多くの異り候點の中にも次の一事特に強く感ぜられ申候。

坐禪和讃の最初の句に「衆生本來佛なり水と氷の如くにて水をはなれて氷なく衆生の外に佛なし」と御座候如く佛教にて伏し拜み居り候釋尊も我々と同じ人間に御座候。唯凡人に優れたる者なりと致し候に引換へ我が基督教に於きては基督は我々と同じ人間の形をこそ取り給ひ候へども、これ即ち我々の言ひつくされざる所の感謝いたすべき神の下し給ひし神の一人子なりとの強さ信念をいただき居り候事にて御座候。即ち吾々基督を信じ居り候者は人間の心を果たさんにはあらず候て神の御心を果さんとつとめ居り候に御座候。かゝる信念あり候てこそ初めて大なる力を以て活動いたし又今盛んに基督教の範圍の擴がり行き居事と存じ候。

今日は歸京以來又休暇初まり候てより初めて東京にてくらし候日曜日に候へば久しぶりにて教會に出席致さんと教會の門をくゞり候へば御寺の門をくゞり候時の何となく冷やり

と致し候感にひきかへて何とも言ひ表はしがたき温かさに包まれ候感いたし候て歩は自然に會堂中に進み申候。先づ跪き候處家人の反對にも關はらず此聖き基督教を信ずる事を許され候神の惠に加へて何十日目かにて共に祈り共に感謝し共に讃美する日を得候、感謝の念こも〴〵起り參り候て唯涙のみ出でゝ如何いたし候ても何の言葉も出まゐらず五分間もひざまづき居り候。

【其五】

噫、迷信

佐藤 昌

妹の病氣！ まだ矢張り惡ざうごいます、盲腸炎に肺炎、其上に百日以上も寢ましたものですから痩せてやせて御話にもなりません、この人があの妹かしらと思ひますと涙が出ます、それに父が又入院せよと御醫者様に申された位ですから私ともてまあ家内中病人と云ふてもよろしうございませう、母の心配考へますと祈らずには居られません、同時に私の様な者でも信者だと思ひますと何とも言はれぬ感謝の念が胸に込み上げて參ります、越後と申しましても大きくございませうが、私の町には教會が三つありますが、町の内では信者の方は殆んど一人もございません、それに佛教が大變に盛んな土地でございますので私の町丈でもお寺が六ッ七ッは確かにございます、御説教のある折には老人小供でどこでもどこでも身動きが出來ぬ位の盛況を呈しますさうでございます、此夏の御休中新聞にて破戒僧の話が出て居りましたので一寸老人に話して上げましたら「まあどこの御寺でもさうです」の返事には驚き入りました。

て此夏一番深く印象されました事は誰でもいざといふ場合には自分より以上の何ものにか依り頼みたいといふ氣のある弱き者である事を目擊いたしました、妹の命は旦夕に迫り父は入院せよと迄申渡され殘る私も服藥せねばならぬと云ふのでございますから、母の心配はどんなでございましたでせう、すると或る近所の方がいらして申します様町から四里位もはなれた地に「オドモー」と云ふ御稻荷様がありますが、其所の女巫は、病氣上の事であれ商賣上の事であれ何でもかんでも判斷をするのでございます其上判斷していたゞく方の祖父母、父母、兄弟、子供等にて沒した方が其女巫に乘り移つて如何にすべきかを知らすといふことなのでございます、で母も心配して居たのでございませう早速月の十九日と云ふ其オドモーの御稻荷様の命日、男の人と二人で參りました、車に乘つて汽車に乘つてやがて其日も暮れかゝる頃歸つて申しますには「ヒメコーゴン神の祟りにて今の御醫者も御見立は良いけれども東の方が最もよろしい、東の方の御醫者様ならば廿日間に屹と直ほると云ふのでございます、東の方の御醫者とは何里もはなれた所に近頃東京の赤十字病院より故あつて此所にお出遊ばした方がいらつしやいますが、今迄の御醫者様は既に盲腸炎も治していたゞき、又色々の事で御世話になり、家と家との關係もあり、父は如何にしても今迄通の御醫者様に御願ひ致しませうと申して居りましたが母が承知致しません、扱ひに來て居る人もまた來る方も來る方も、皆東の方がいゝでせう佛の仰しやる事で僞はないと母に申て居りました、で結局は母方の意見が通されて「それなら御前方の勝手にせよ」とて父はもう何も申しませんでした。東の方の御醫者様に御診察を願ひました。

なる程メキ〳〵と良くなつてもう廿日位の内には腰が立てるとて大變喜び家中天地がひつくりかへりさうな有様それは〳〵大にぎやかになりました、誰彼となく御稻荷様の御利益を讃めたゝえ一も御稻荷様二も三もとて何で

もかんでも御稲荷様でなければならぬ様な、話、私などが何か申しますとお前の様な神も佛も分らぬ、耶蘇敎の人になど何が分るものですかと云ふのでございます。

さうこうして居ります内に一寸した機から又盲腸炎になりまして再び氷でなければ氷枕でなければと云ふ様になりました、まだ少さい子供が百日以上もさん／＼苦しみました上にまた引かへしましたので御座います故咳込んでは熱が出て、熱が出ては御腹が痛いといふので幾度丈夫な（妹よりも）私がかはつてやりたいと泣きましたてせうさうて自分一人で苦しむのでなくて御一人の神様が父母以上愛して下さる神様が共に苦んで下さる事をのみ込ましてやりたうございましたてせう。

病氣にならぬ前は私の話す事もわかる様でございましたが病氣の折の妹の頭の中には基督敎はいやなものと云ふより他は何も入つて居らぬ様でございました、私の責任は恐しい程重うございます、御稲荷様の御判斷はこうしてすつかり外づれました妹がまた重患だと云ふ事を御聞き下すつた方は皆様再び女巫に見ておもらいなすつたらと勸めました、今度は福井といふ町から二里位はなれた山中の人、或朝四時頃でございましたが誰か蚊帳の外で私の名をよんで居ります、それは伯母でございました、是からすぐに起き出て福井に參りませうとの事、伯母は耳がもう駄目な故家内の私を連れて行かうといふのでした。

私は參りましたの、珍しい物を見たさに、又一は伯母の賴みに從つて。丁度六時頃裏門よりぬけ出てゝ目的地につきましたのは九時過先着の方が三人ありました爲、午後一時迄待たねばなりませんでした、やがて其方の室に入りました室は六疊敷位正面に一間位の床がありしてそこには床一パイ神だなばかりありました神だなには色々な像が飾られお蠟燭が何本も何本もつけられてありました其より少左によつて机があり其上に私共が家持たせてやつたお米に病人が眘つてつけて居りました被服物が一個をのせまして其上に三つ組の麻をのせ白い上下様の衣を着物の上から着ましたまだお若い目の見えぬ女の方が其机の前に御座りになりました。

病人の事父母の事家のむきなど聞いて[illegible]りました後しやく文をとなえて申します様今月の三日には文珠菩薩を信仰しました御醫者様は西の方がよろしい父の年廻り母の年廻り共に惡くて父は殊に南の方とは餘り關係せぬ様にと申しこれから五人の佛が出る故良くわからぬ所はきゝかへして下さるやうにとの事でございました佛とは沒した祖父母父の兄弟壁から外の人とて母のおばあ様病人の妹皆で五人でございました、やがて其女巫は寢入つた樣に見うけられましたが次の様な事を申しました、會ひたや／＼子寶に孫寶今迄も待つて待つて居たが今日漸く氣がついて良く來てくれた、併し病人について良く相談に來た嬉れしいぞ妹の病氣は初めは風邪であつたが今は腦が惡くて肺が惡うて腹が惡うて胃が惡くてもうどんなにしても心配しても生きられぬ諦らめてくれよ、それでもあきらめの爲に新潟の醫學専門學校に入院させよ九分九厘は駄目だがあきらめの爲に願ひます自分は今極樂浄土のまん中に居ります故何も案ぜぬ様にして只佛を信仰せよ、もうかへらなければならぬ故これにて別れますが病人については御醫者様の御藥と御藥との間に胃散と何丸といふをまぜてのませてくださいこれ丈は願ひますよ」

次の人次の人誰も同じ様な事を申しましたかくして私共の番も終りまして其室から出ましたら後にまだ二人もいらつしやいました歸途涼しい風をうけつゝ田のなかの道を歩いて居りました時なぜに前の女巫は東の御醫者様が良いといひ後の女巫は西の御醫者様がいゝと

いふのでございませう同じ佛の言葉を借りて云ふのなら同じ事をいふべきではありますまいかと一人思ふて居りました後で伯母に伺つて見ましたらそれだから上手下手があつて從つてはやりすたりもするわけですとの事から何も言葉さへ出ぬのでございました。

家に歸りましたのは午後四時過ぎ殘らず話しました死ぬか生くかといふ病人をどうして人院などがさせられませう。

矛盾せる女巫の言葉、あく迄迷信にのまれた人の運命、祈らずには居られません。

あの西の空の美夕霽しげき夏の朝ましろの雪の降る一家揃ふて眞の神を讃美しつゝ心よく祈る事が出來ましたら如何に幸ある事でございませう。何卒御祈り下さいまし。

【其六】　深き印象

江田　綾子

たのしい夏の休暇も過ぎまして初秋爰に第二學期を迎へまして靜に回顧して見ますと、最初の計畫に對しまして萬事が齟齬いたしましたので誠に不滿足に存じますが而し歩む道だけ迷はずにすみましたのを深く喜んで居ります。僅間に夏休暇を通じて考へました問題につきましての經驗は申上られませんから折にふれましての感想を二つ丈申上げたいと存じます。私は今夏家庭の人となりますと間もなく病氣のため病院通をする事になりました。實は私の診ていたゞいて居ります醫學士は二三の病院へ出勤せられて居りますので少しく快方にむかひましてから散歩かた〴〵其の中の一を撰んで七月廿七日といふ暑い日に參院いたすことになりました。途中電車を降りてから二度程道をたづねました、一人は巡査で一人は大きな薪炭商の主人でした。いづれも病院の名を申しますと最初の丁寧にひきかへて威丈高にもなり横柄にもなりました。敎へられた通りに歩を運んで參りますと成程一つ橋が行手に見えまして、影の無い正午近い河岸通を顏の眞靑な藥瓶をさげた人々がチラホラと來るのに遇ひました。併し私は其人々が照りつくやうな炎暑に洋傘も持たないと云ふことには不審も抱かない、只病氣といふことには何と氣の毒な事だらうと自分から推て同情を持ちながら並木の柳を涼しく控へた堂々たる建物の前に參りまして先づこれで安心とホッと一息して刺を通じますと向ふは小使とほぼしき人「貴女はお草履ですから受付までお出下さいまし」と先に立つて案内をしてくれました履物といふ注意に、ふと昇降口を見ますとこれは又何といたしたので御座いませう、汚い草履が山と積んでありまして猶あたりに散らばつて居りますのを給仕がお箸をもつて摘みあげて居ります此の時初めて私は疑(うたがひ)がむら〳〵と湧いて矢の如き好奇心に誘はれました折を待合室からドアーが半分開いて「何卒此方へ」と白衣白帽の人が先生からのお迎へとして來てくれました、何氣なくその室へと一歩踏み入れました私は、一見初めて、この病院といふものを解することが出來ました。學校のホールドを四つ合併した位の高いあかるい天井の下なる廣大なる室には、老といはず若といはず男といはず女といはず立錐の地なきまでに群集した細民が、病苦の呻吟と乳をせがむ赤兒の泣聲とを聞きながら「何番」と太く長く響くボーイの聲と、自分達の札とをやつれた顏で見合せて居りました。弓のやうに腰の曲屈つた老爺が與へられた藥瓶を大切そうに抱へて目をショボ〴〵させながら外へ出て行きました。柱の側に赤い帶を締た十五六の凄い程靑い顏の少女がお藥をもつた儘歩けないでボンヤリ立つてゐました、急に外が騷がしくなつて私の傍におろされた釣臺には櫛卷にした四十五六の婦人が洗ひ晒し

た浴衣に細帯といふ姿で俯向になつたまゝグッタリとして生死の程も氣遣しく思はれました。私は「貧」と云ふ字の下に映出されたる此の活畫を長く正面に見て居られませんでした、胸が一杯になつて泣くまいと思つても涙を止ることが出來ません。間もなく綺麗な室に案内されまして此室で先生のお手の明くのを待つことになりました。二三人の看護婦は私を見て挨拶して立ち去らうと致しますので無理におとめして略ぼ察してはをりましたがあらためて病院の性質をきゝますと其の中の一人がすぐ「當院は海軍病院といふ名ではありますが事なき平時は軍醫の方達の研究のため市で施療病院を此に附屬して兩方の利益をはかつて居ります患者は東京市内の中流以下の者で區役所の許可を得たものは何時でも施療されるので御座います此の類の病院では當院は設備が充分致しておりますので患者にとつては幸福なことで御座います」と答へてくれました。私は次に「此の院内に看護婦で信者の方がおいでですか」とお問ひすると「一人ゐらつしやいます」また「宗教上の講話など持つ機會がおありですか」とおたづねすると「めつたに御座いません、そう／＼過日三井の病院で青年會のお名前を失念いたしましたが御婦人の先生から御講話を承りました。全部出席して大喜びで歸院いたしました」私はもう一つ「御勤務中どういふ事を深く御感じになりますか」との問には少し考へられて後「同じ病人でも生活に心配のないものはお氣の毒ながら先づ幸福といはねばなりません當院の患者は其點につきましてはあはれで御座います面會にまゐると申しましても其の日暮で御座いますから一日の仕事を終へて歸る途次妻は夫をとひ子は親の安否を尋ねるやうな工合で其のお話といつても明日の生活の問題の事のみいつてゐるやうに思はれます。それが全治しで退院してくれゝば共に喜ぶので御座いますが命つきて當院で相果てるのも御座います仕事服着たお内儀さん脊中に一人手には四五人つれて、茫然と夫の死骸を見つめてゐる時などは自分の親兄弟を失ふ時よりも立會ふ自分は遙に辛いと存じます」としんみりとした言葉に「私は先程からお話を伺つてゐて他人の喜が自分の喜びとなり他人の悲が自分の悲となる貴い生活をして居られる皆樣の御境遇をおうらやみ申し上げずには居られません、それと共に皆樣の職業に多大な御同情を表せられる私の師私の友にあはれなる患者の有樣と皆樣の御美しい御活動を申上ずにも居られません開校のあかつきにはきつと御紹介してさしあげますといふのを最後といたしまして診察室にまゐることになりました。やがて歸宅して見ますと大津の修養會にお出でになつた某姉からのおはがきの机上においてありましてすみ行く一節に「〇子樣あなたは御病氣でこの樂しい會に御出でになれぬのを深く殘念に存じます而し神の御心は那邊におはしますやら私共にはわかりかねます」とのお筆の跡。あゝよくいつて下さつた。ほんとに今日といふ今日は自分が病氣であつたが故に自分の四邊は豐なる惠をもつてみたされておつたのであつたとつく／＼たどる事が出來たのでありました。「神の御心は何處におはすかわかりかねる」實にその通りであります。斯うして惠を知つた自分は幸あるものですが忘れやうとしても又忘れられぬのは哀れなる人々の身の上です。ひたすらに氣遣れまして感謝はさておいて彼等の爲に祝福の祈禱はまづ口をついて涙ながらに其の夕べ捧げられました。それからもう一つ深く感じましたことは八月に入りましてから寒暖計も九十何度をこしました酷暑の正午一封の小包が屆きました。取次いてくれました者から受取つて開かうと存じますと妙なことには包紙が濡

れて居りますので神經質な私は早速椽に出て日光に乾しながら考へておりましたがふと「これは汗である、誰の汗？郵便脚夫のそれと自分ながら一點疑をさしはさむる事が出來ませんでした、このあついのに屆けてくれてお苦勞であつたと去つてあらぬ人に心から禮を述べてさて取り出て見ましたのは「日々の力」といふ一冊の御本。包んで下さつた方は日頃御心のおやさしいとし子様與へられしは青年會頁をくらずとも貴き文字は花と咲いてゐやうとすぐ机上に貴く喜しく備へました。實は近頃宗敎上の自覺の第一歩にふみこみました自分は刺戟の多いせいで御座いますが分からない分からないでたまく無意味に一日を過しては自分で自分を持て餘まして居りました處へ手にいたしたことですから大變な喜びで御座います。「求めよ必ず與へられん」といふことは今自分の身の上ではないかと思ひましてどうぞ御心のあるところと送つて下さつた御方の御志にそむきたくないものと、其翌朝から今日にいたりますまで朝の祈禱の前に一讀して一日の修養の方針を全然之によつて定めて居りますが自分によつてあやふく犯されやうとする罪は幾度か轉じて幸福に變へられて居ります申上ぐる凡てはこれだけであります、去つては再び歸らぬ大正三年の夏休暇は私の生涯にとりましての深い印象を殘して爰に殘りなくなりました。

【其　七】

父の看護

示村喜美香

私は此暑中休暇を父の看護に過しました、實は先頃一人の下女が歸國しました處へ又も父の郷里から來て永い間働いて居たもう一人のが病氣の爲め歸國してしまいまして、其後間もなく父が病氣になつたので御座いました一時は重患に陷り大變心配致しましたが幸にも私が休暇に成りました頃少し薄らぎました間もなく弟もお休みになりましたので十年餘りを母なき家庭に私共を不自由の中に養育して下されたのに今迄は十分盡す事も出來ず我儘のみ致して來ましたが今こそ少しでも報ふろ時、お互に休暇ではあるし他人の手を借らずに二人して一心こめて看護しませう、そしで靜な空氣の淸い所が宜からうと弟と相談し直に看護婦を還して此蒲田村に引き移り眞に親子三人にて悲しい中にも樂しい田舍生活を致す事になりました、此所は水の惡い爲、遠い河に水汲みに參らねばなりませんから水汲と掃除を弟が致し他の事は私の仕事として交互に父の側に居る事に致し一生懸命に看護しました、大分快くなり暗中に燈火を見た樣な氣がして二人して喜び初めました、其も束の間にて、又も餘病が續發しまして、何分今迄の衰弱の上とて苦痛の度も一通りでなきやうに見受けられました、忘れもせぬ八月四日の夜一時頃至つて忍耐强い父が苦しいくと泣かれました、實に其時は途方にくれてしまい、如何致しませうと二人で暫く茫然と致しました、其時の心持は到底生涯忘れられないでせうと存じます、そして此時の祈りが私の生れて初ての神樣を信じての聖い御祈であつたと思ひます。それでも日を經るに從て父は目に見えて一日くと快くなり今では散歩も致す樣になり全く天の御助けだと感謝して全快後の事など何かと考へて居ります。私も隨分失望も致しましたがいつも私の如き者のため又父の爲めに御祈り下さる方を思ひ出し、又「日々の力」を拜讀しては勵まされて元氣よく丈夫に日々の務めを忠實に盡す事が出來た事を深くく心から感謝して此頃は見るもの聞くもの樂しく嬉しく實に愉快で堪りません、而して更に嬉しく存じましたのは今迄不信仰であつた私が少しでも神樣に近く事が出來て心

強く暮すやうになつた事で御座います、一兩日前から女中も參り賑やかになりました、又此夏は毎日日中日蔭で洗濯する事にきめました所が大變身體もしつかりして却つて涼しく氣分もよく感じましたから來る年の夏も來る夏も之を實行致さうと思つて今から期して居ります。

修養會所感

（六）　東京　白石テル

此度の夏期修養會にて不思議にも神の御導きにより私如き者が參加の幸福を得候事を思ひ、只管に感謝致候其節は皆々樣に色々御親切なる御世話に預り誠に難有く御禮申上候。

（七）　小田原　思地加壽惠

夜半照り渡る月に判じて過ぎし週日の恩惠を思ひ感慨切なるもの有之候神の宏大無邊なる愛と自己の小さく賤しき事を神の有給ひし聖旨と我が頑なる拒否と、神が先生方の御骨折を通じて私を神の赦にして且慈愛と大なる教と自己の不信とを自覺さしめ給ひ家庭の境遇を同じうする友人と新に心を決し大なる覺悟を得て只管に其が完うせられん間に祈り居候當地に來りて近隣の者を訪問せし處昔の遊び仲間の二人と其母まで、一人は信者二人は熱心なる求道者なりしを知り愉快此上もなく候と同時に年々來りながら今まで一言も教を說かざりし怠の罪を感じ申候。

（八）　盛岡　佐藤とく

過ぎし日大津に開催相成りし修養會に主の御導きに由り一週間列なり參て御願ひいたし上候惠みにいやまして多大の御恩寵を蒙り、感謝の外これなく候皆々樣の御盡力厚く御禮いたし候、小さき我を通して現在に働き給ふ主の御大能を仰ぎ度く切に祈り居り申候、何卒此の地の會のため御記憶下され度常に皆樣の御祈に加へ下され候やうひたすら願ひ上げ候。

（九）　福山　高折かなを

毎年修養會に出席いたしまして毎年異つた印象を與へられ異つた方法で神の御惠を傳へらるゝ樣に思はれます。そして年一年と修養會の結果が如何にも實のある好い結果に向ふ事と深く思はれるので御座います。其故に一度修養會に出席すれば如何しても又來年もと願はずには居られないので御座います。今までれむつて居た私もあの會のお蔭で呼びさまされます〳〵盡す可き責任の重き事を感ずると同時に與へられたる特權を感謝せずには居られませぬ。先學期福山に居ての私はまだ盡し樣が足りませんでした努力が自分の及ぶ丈をして居りませんでした。盡す可き義務と思はず特權と感じつゝ務めて見たいと心に約束いたしました横澤樣の事など伺ひますと自分の足りない事を深し恥かしく思ふので御座います。今度福山から先生に御音信申上げる時には嬉んで好成績を御知らせ致したい事と今から望み今から期して居ります。八月三十日には東京を發するつもりに致して居ります多分今は歸京いたさないで御座いませう來年の修養會までは御目にかゝれない事と存します。來年の修養會を一層の希望をもつて待つて居ります。

彙報

◉東京基督教女子青年會

聖書研究組　本學期は九月十四日を以て開始す、新に女子職業學校の爲に一組を增せり、現在組數本會内に開くもののみにて十二なり。▲本會附屬日曜學校　にては十六日午後敎師會を開き敎授方法に就ての相談あり。▲聖書組出席者總會合　十九日午後二時半より本會に於て催し河井幹事より全國協同傳道開始について我等も之を助けん爲に聖書の組を盛にし各自一人を導くやうとの奬勵あり茶菓の饗應ありて互に親睦散會せしが、友人を導かんと約せし者十四人又新に出席せんと記名せし姉妹十三名を得たり、總出席者六十八名なりき。▲寄宿舍委員會　廿四日午前十時半より新渡戸夫人邸に於て開く、第二寄宿舍々監大西絹子姉は病氣の爲療養中は山本まち子姉臨時代理監督され、又兩寄宿舍とも目下二三の缺員ある由の報告あり。▲旅行者の友委員會　廿五日午後本會に於て催す。▲ボーイスクラブ　本會所屬幼稚園好友園に於ては夏休中よりボーイス、クラブを設けて每週一回英語敎授をなしつゝあり。▲新入會員　左の如し

富谷よし子	松瀬千重子	綿谷禮利子
前川久江	藤原てる子	廣尾つや子
小瀬川てつ	菅野たづ子	波多野はま
船尾よし江	中村すか	ミス、ルース、フレンチ

◉旅行者の友係の日誌拔書

八月十六日、小松崎きよ電車に乘らず徒歩養老院へ行けりと聞ゝ心元なく思ひ同院を訪問して無事なるを見る同女はトラホームの憂ありしに赤坂病院の診斷にては然らずとの事ゆへ前の奉公先小野氏へ歸し吳れと哀願するに小田老姉もその言を信じ小野氏へ送らんため支部へ連れ行く。▲同日牛込署長家庭へ送りたる吉田マツ歸心矢の如く終に旅費自辨歸國したり。▲十八日紡績工場へ行く二十人の少女七時三分の列車にて來る何れも病者の如し奉公の意なきやと問へば「女工の方が金になります」と。▲十九日黑澤姉より小松崎きよの眼疾につき醫師に質されたるにトラホー

ムなり去れど危險の時期はすぎたり注意すれば差支なしと、然し小野氏は斷然拒絶され、他に雇入る人もなければ終に古單衣下駄等惠與し會の費用にて歸國せしむる事となせり。同日佐々木菊江もトラホームに罹り居たるを發見し養老院へ送り治療させんと準備中京橋區の親戚へ送りくれと實父よりの通知を得直ちに其方へ送る。▲二十二日六時半の列車にて來りし娘あり曩に牛込の某酒店へ奉公中八圓の給料を前借して九ヶ月を勤めし今日迄一錢の給金も與へくれず伯父へ計り他へ奉公せん爲再度上京したるなりと必要に迫し時來れと名刺を渡す。▲福島より奉公の目的にて上京せりといふ若き男女あり女子は奉公口あれど男子は口入業者へ行かれよと話の中に群集に紛れ姿を失す逃亡者の疑あれば其儘やみぬ。▲驛内に彷ひ空腹を訴ふる二人の憫なる婦人へ食費を惠與す。▲二十四日四時四十五分の列車にて來りし宮城縣よりの女子十九歲あり上京の理由は橋場なる工場へ僱はれ度望みなりと待合室に誘ひ工女を斷念せしめんと訓戒したるも躊躇數刻、折柄の着列車を迎んと室を出で歸り來れば彼女は在らず、助けの手を拂ふて危にゆく可憐の女なり。▲二十五日、去る十九日歸國せしめたる小松崎きよ交番に來る列車中にて惡漢にかゝり途中下車某旅宿へ一泊翌日上京淺草の銘酒店へ十圓に賣られしを逃走し駒込署に拘留一日又も各所に徘徊終に上野驛へ來れるなりと交番に托し朝より一食を口にせずと查君の助言により食費を與ふ。▲秋田の者(廿歲)にて富士工場に來しも世話人の住所不明、茨城の者(十五歲)にて小山工場より茨城實母の許へ歸省せんとするも汽車に乘後れ一錢の貯へなく何れも查君に訴へしを交番より委托され支部へ一泊せしむ。▲二十六日十四歲の少年父母の命を帶び在京中の實兄を歸國せしめんと越後より來る、然るに兄は旅費の工夫出來ずとて弟の歸國旅金三圓を受取り弟にモズリン會社に居る叔母を尋ね行き旅費を得て歸れと弟止むなく同會社に至れば面會を拒絶せらる途方にくれ驛へ歸りて兄を求

むれども發車後にて兄の影なし、涙にくれて査君に訴ふ氣の毒に堪へず本所押上なる同會社へ同伴事務員と叔母に面會事情を語り壹圓五十錢を受取助役に交渉半額にて無事歸國せしむ。▲二十七日本日より二週間の休暇を得たり所用あり林姉を訪ねんと午前八時上野驛へ行く、又も小松崎きよを交番に見る多少精神に異狀あるやの疑あり驛長の厚意にて前日の切符にて乘車を諾されたれば本人を驛內へ連行んとするに頑として動かず終に隙を窺ひ一目散に逃げ去る又も救ひの手を離れ行く彼の行末や心元なし。▲十五日は多忙なる日にて七人の娘を各自の目的地へ電車又は人力にて送る何れも感謝の意を表す。▲五時十分の列車にて群馬縣より來し娘(十九歲)あり奉公の目的にて母の承諾證持參せり今宵旅宿へ一泊翌日口入業者へ行んと云ふ便なき者なれば支部へ連行き林姉に托す。▲山形縣より來りし婦人(卅四歲)あり紡績工場へ實妹を便り上京したるに東海道小山工場へ轉じ居れりと進退極まり歸國せんにも旅費はなし徒歩歸らんかと思ひしも不可能と知り止みぬと支部へ同伴しぬ。▲無斷國を出で辛じて上野まで來りしと云ふ少年あり交番へ托す食費を惠む。(九月十六日　松崎まき)

◉ウヰルミナ女學校青年會

當青年會にては二學期の始業式後役員會をひらき今學期度に於ける種々の事を議決致し候、此度は長き間　青年　會の爲御盡し下され又不束なる私共を御導き給はりしモルガン深井兩先生を送り申候、されど神の御惠に依り早速アレギサンダー熊澤兩先生等を御迎へ致し感謝に堪えず候、先生方はかつて御經驗厚き事なれば靑年會も今學期よりはいやまして發展を加へ面目を新にする事と今よりたのもしく存じ候。役員中松村久江姉は過般家事の都合上御歸鄉になり青山ゆき姉代りて會計をつとめらるゝことに相成り候。控室に開ける青年會の小事業文具店良心箱も至極よき成績を擧げ居り候、益々盛大ならしむ積りに御座候。時は活動の時節となり凡ての役員委員

も新らしき努力と勇氣とを以て及ばずながら將來のため盡力いたし居り候。

消息

○大平操姉　七月一日福岡市にて男子御分娩昌彥と御命名

○城戶順子姉　七月上旬傳道のため滿州に渡られ九月下旬御歸朝。

○吉田のぶ子姉　横濱共立女學校教授なる同姉は音樂研究のため七月渡米されたり。

○宮崎貞子姉　福岡市にて七月御受洗。

○ハーツホン教師　同姉は七月十三日御令姪ナン姉平野千惠子姉及女子學院卒業生三浦盛世姉同伴にて渡米。平野姉はボストンにて三浦姉はヒイデルヒイヤにて御勉學の由。

○梅澤かね子姉　七月中籾倉作助氏と御結婚。

○山田修子夫人　故福三郎氏の御遺志により金五十圓を横濱女子青年會に寄附せらる。

○小橋三四子姉　讀賣新聞社に御勤務、過般芝區三田一ノ二十六に轉居さる。

○横澤つぎ子姉　札幌高等女學校を辭し目下宮城縣高等女學校に奉職

○湯田きみの姉　德基高等女學校を辭し横澤姉の後任として札幌に赴任。

○大川喜代子姉　水戶女子師範學校を辭し東京府下池袋成蹊實務學校に教授さる。

○木田きよ子姉　名古屋市金城女學校を辭し岡山縣津山高等女學校に奉職。

○多賀つや子姉　不快にて郷里岡山縣にて御靜養中。

○植村澄江子姉　九月四日佐波亘氏と御結婚大森に住居さる。

○篠田しげ子姉　九月二十三日東京牛込教會牧師田島進氏と御結婚。

○加藤さく子姉　北京に一年餘りを送られしが七月中東京に歸へられたり。

○加藤たか子姉　ミルウォーキー市を辭しこの秋よりはニューヨーク女子青年會幹事養生所に修學。御住所は

　　co Y. W. C. A. of U. S. A.
　　600 Lexington Ave,
　　New York City,
　　U. S. A.

○新渡戶琴子姉　夏期中御病氣の處昨今追々快方に赴かるゝ由、新渡戶博士の御怪我は殆ど全治し目下湯の河原に御湯治中。

○松宮信子夫人　の御父君は八月御逝去。

○大西絹子姉　安藤坂女子青年會寄宿舍々監なる同姉は先月來病氣にて目下入院中、追々快方に赴かる。

○ミス、ベーカー　九月より横濱女子青年會幹事として同市に住居さる、同孃の御兩親は六ヶ月本邦に滯在されしが九月下旬朝鮮へ御出立

○久野久子姉　は八月中令妹を亡はれ九月上旬より御母公御重症にて看護中なり幸御快方の由。

○丸信子姉　共立女學校助教師なる同姉は八月中久野久子姉に代りて横濱女子青年會に執務されたり。

○菅野田鶴子夫人　は早稻田大學教授菅野氏の令閨にして夙に篤信を以て令聞あり、數年來重病なる良人の看護、四人の子女の教育の傍ら個人傳道に熱心なるは誰人も嘆賞する處なり、夫人は目下女子青年會

附屬好友園一部の責任を負擔し其餘暇に知友の爲に吳服物その他買物の世話せらる。地方にて適當なる吳服物需用の方は同夫人に託されなば市價よりも二三割の廉價を以つて品質確かなる物を得らるべし既に同夫人の手を經て衣服新調の方々は常に滿足の意を表はし他人にも紹介さるゝは夫人の信用を證明するに足るべし、女子青年界讀者中この便宜を利用して續々同夫人に御注文ありたし。

○龜井たか子姉は東京三省堂主人龜井氏の令孃にして永らく女子英學塾に修學されしが今回東京市神田區裏神保町十番地へ龍生會なるものを組織して池坊花道通信教授を開始し地方にて良師を得る事能はざる人々の便宜を計らんため斯道の諸先生に依願し親切丁寧を旨とせる說明、美麗なる寫眞圖及分解圖等を挿入し內容の完備せる通信錄を發行し又種々の特典多きと他に其の比を見ざる處なり。女子青年會は龜井姉が其の教授法を保證し會員諸姉に御入會あらん事を勸誘す

○會友申込（本部報告）

（普通）花村むつ　鈴木美代　岡山なか　岸本一枝
宮川幹枝
（維持）高田常代

○會友會費領收（本部報告）

金壹圓　花村むつ　鈴木美代　岡山はな　多賀艷子
今泉えい　關根松子　岸本一枝　宮川幹枝
秋元美代　八太かみ　筒井たき
金貳圓　加藤久子　河井道子

金壹圓貳拾五錢（但本年度分）高田常代
金五拾錢　渡邊しづ
金貳圓　ミセス、スミス　ミス、ケギー　ミセス、コップ
ミス、プリンケル　ミス、ヤング　ミス、ヒユース
ミセス、コルテス　ミス、ルーミス
ミセス、ウライシヤワー　ミセス、ピンフオード
ミセス、マカルピン　ミス、シヤープレス
ミセス、ルーミス　ミス、エカック　ミス、ドーデイ
ミス、ライダー　ミセス、デピリン　ミセス、カイパー
金五圓　ミス、トリストラム
ミスター、マーシヤル　ミス、ウオーズウオルス
ミス、ボーマン　ミス、ハミルトン　ミス、セルス
ミセス、アンドリユース
金三圓　ミス、フレッツ

○雜誌「女子青年界」代金領收

金七拾錢加藤てい（自大正三年八月至同四年七月）金矢テウ（自大正三年一月至同年十二月）
茂木春子（自大正三年七月至同四年六月）加賀美春海（自大正三年八月至同四年七月）
森村確女（自大正三年八月至同四年七月）武藤いその（自大正三年四月至同四年三月）
小方光子（自大正三年八月至同四年七月）河東田きい（自大正三年七月至同四年六月）
武田慶子（自大正三年一月至同四年十二）五十貝晴子（自大正三年四月至同四年三月）
吉見文子（自大正三年七月至同四年六月）淸水みづゑ（自大正三年八月至同四年七月）

金七拾錢

岩村 幸子（自大正三年二月至同四年一月） 吉田よしを（自大正三年八月至同四年七月）
永山 小子（自大正三年七月至同四年六月） 鹽川とめ代（自大正三年八月至同四年七月）
荒川 正雄（自大正三年七月至自四年六月） 小口みのる（自大正三年四月至同四年三月）
上田 芳尾（自大正三年一月至同年十二月） 岩崎 しん（自大正三年　月至同四年六月）
渡邊 栟子（自大正三年七月至同四年六月） 代田 初子（自大正三年八月至同四年七月）
內田 くに（自大正三年八月至同四年七月） 酒井 まさ（自大正三年八月至同四年七月）
千明 以久（自大正三年七月至同四年六月） 宮崎 貞子（自大正三年八月至同四年七月）
名取 はな（自大正三年九月至同四年八月） 佐藤 ハル（自大正三年八月至同年七月）
石原 幸子（自大正三年一月至同年十二月） 閼根 まつ（八九月合併號五冊代）
神戸女院青年會（自大正三年二月至同四年一月）
大連基督教青年會（自大正三年八月至同四年七月）
小原 きよ（自大正三年八月至同四年七月） 三笠 於幸（自大正三年十月至同四年九月）
荒川 眞子（自大正三年三月至同四年二月）

金壹圓貳拾錢

富山 夫人（自大正三年五月至同四年四月） 黒石 夫人（自大正三年五月至同四年四月）
池內 夫人（自大正三年五月至同四年四月） 田中 しほ（自大正三年五月至同四年四月）
木野 夫人（自大正三年五月至同四年四月） 田中 きえ（自大正三年五月至同四年四月）
常田 夫人（自大正三年五月至同四年四月） 森 夫人（自大正三年七月至同四年六月）
右田 夫人（自大正三年七月至同四年六月） 村上 夫人（自大正四年七月至同六年六月）

河井 夫人（自大正三年七月至同四年六月） 三上 夫人（自大正三年七月至同四年六月）
田中 夫人（自大正三年五月至同四年四月） 安藝 夫人（自大正三年十月至同四年九月）

金三拾五錢

高橋隆馬（自大正三年七月至同年十一月） 永野 睦子（自大正三年七月至同四年十一月）
大槻愛子（自大正三年七月至同年十一月） 村岡 章（自大正三年七月至同年十一月）
邊見たま（自大正三年八月至同年十一月）

金壹圓四拾錢

宮崎ぶん（自大正三年八月至同五年七月） 加茂絢子（自大正三年三月至同五年二月）
佐藤梅野（自大正二年十二月至同四年十一月）
札幌女子青年會（自大二年十一月至同二年十月二部宛代價）

金壹圓 河井 けい（自大正二年七月至同三年十一月） 河村 とも（自大正三年八月至同四年十二月）
金五拾六錢 有馬ふじ（自大正三年八月至同四年三月） 阪本 花代（八九月合併號四部代）
金五拾錢（自大正三年八月至同四年二月） 富士 淸野
金拾四錢（大正三年八九月合併號） 青木 英子
金四拾貳錢（自大正三年八月至同四年一月） 永山 チカ 渡邊 藤野
金三圓貳拾九錢（大正三年七月號四拾七册分） 共立女學校青年會
金貳圓拾錢（自大正三年二月至同四年一月三部宛代） ウヰルミナ女學校青年會
金三圓五拾錢（自大正三年八月至同四年七月四部代及自大正三年七月至同四年六月ノ一部代） 傳道女學校青年會

◎正誤 前號誌上赤星仙太氏講演大要中四七頁下十二行千七百十八年は千七百八十年、四八頁下三行十六年前は四十年前、四九頁上五行ドッドリッヒはドッドリッチ、五一頁上四行ブラングルはトランブル、五二頁上三行英は瑞、五二頁七行タッタード夫人はスタッタード女史の誤に付訂正す。

日本基督教女子青年會

目的

日本全國の諸學校及び市邑に於ける青年女子の間に基督教女子青年會を設立し其一致聯合を圖り以て萬國基督教女子青年會と連絡する事

左の事項を奬勵す

青年女子の間に基督教的智識を普及し之を導き基督耶蘇を救主として信奉せしむる事

青年女子の靈的生命を涵養し獻身的行爲を勵し其智識社交身體の發達を圖る事

青年女子をして萬國に基督の王國を擴張せしむる事

會友

基督教女子青年會未設の地或は學校に於て本會の主旨を賛助し事業を奬勵せんと欲する者を以て本會の會友とす

會友の種類及會費は左の如し

通常　年　金壹圓　維持　年　金貳圓以上

會友には本會機關雜誌「女子青年界」を送附す

會友たらんと欲する者は本會本部に申出べし

事業一班

巡廻訪問　本會幹事を派遣して支部を奬勵し或は地方の巡廻視察をなさしめ本會の發展を圖る

出張講演　廣く一般女子の需に應じて講師を派遣す

機關雜誌　月刊「女子青年界」を發行し靈性智識の養に供す

紹介部　一般女子のため諸般の紹介をなす

寄宿舍　東京市内に青年女子の爲監督寄宿舍の設備有り將來他の都市にも設立せん事を期す

宿泊所　外國婦人の要求に應じ併て日本の眞相を紹介す

夏季修養會　毎年夏季山水明媚の勝地に開會し專ら女子の修養を圖る

旅行者の友　地方より上京する婦女子の保護を要する者の救濟保護に任ず

社會部　所屬幼稚園有り主として下級社會の幼兒を收容し且其家庭の傳道啓導につとむ

中央委員

委員長　井深花子
副委員長　岡見惠子
記錄書記　三谷民子
會計　井上友子
萬國基督教女子青年會同盟委員　河井道子

委員
津田梅子(東京)
エ、ピ、ウェスト(東京)
鈴木歌子(東京)
小此木松子(東京)
長谷川喜多子(東京)
サラ、エリス(東京)
イ、クレメント(東京)
山田千代子(横濱)
廣岡淺子(大阪)
ケー、トリストラム(大阪)
エム、エフ、デントン(京都)
佐伯小糸(京都)
松田道子(京都)
エス、ソール(神戸)
上代淑子(岡山)

幹事

總幹事(本部)　河井道子
同　(同)　エ、シー、マグドナルド
書記(同)　アール、レーガン
總幹事(東京)　エム、エル、マシウ
幹事(同)　シー、アール、ワトネ
特志幹事(同)　エム、ペーヂ
幹事(横濱)　久野ひさ子
事務員(本部)　河口正子
事務員(東京)　大呑久子
旅行者の友係　林ふさ　松崎滿喜
幼稚園主任保姆　大槻愛子
幼稚園取締　菅野田鶴
寄宿舍監(第一)　門倉ぶじ
寄宿舍監(第二)　大西絹子
宿泊所取締　ミス、ダルトン

東京市牛込區田町三丁目十二番地

日本基督教女子青年會本部

東京基督女子青年會所屬

東京市牛込區納戸町

第一寄宿舍

目下缺員あり希望の方は此際入舍御申込ありたし（舍則御入用の向は御報次第進呈）

東京市小石川區水道町（安藤坂）

第二寄宿舍

東京基督敎女子青年會所屬

本誌定價

一部（郵共）	金七錢
一ヶ年分	金七拾錢
海外	金拾壹錢
	金壹圓廿四錢

廣告料

一頁	金六圓
半頁	金三圓五十錢
四分ノ一	金貳圓
一行	金貳拾錢

大正三年九月廿八日印刷納本

大正三年十月一日發行

發行所　東京市牛込區田町三丁目十二番地　日本基督敎女子青年會

編輯兼發行人　東京市牛込區田町三丁目十二番地　河井道子

印刷人　東京市芝區櫻田和泉町七番地　鈴木吉次郎

印刷所　東京市芝區櫻田和泉町七番地　三成舍

高野重三先生著

婦人問題早わかり

附「婦人と勞働」

著者高野重三先生は、我國に於ける眞面目なる婦人問題研究者中のオーソリチーである。先生未だ我國に最新の學理に基きて、平易簡明且つ根本的に婦人問題を說明したる書なきを遺憾とし、多年の蘊蓄を傾け、其の趣味と靈感に滿ちたる筆を揮て此の書を著はされたのである。附錄オリブ・シュライネル女史の『婦人と勞働』は、歐米に於て最新婦人問題の『聖書』なりと稱せられ、目下歐米各國にて盛んに飜刻されつゝある名著であるが、先生此の名著を抄譯して、此の書と合せて出版せられたるものである。我國の現狀を憂ひ、世界最新の思想に觸れんとせらるゝ人々には必讀の書である。

好評嘖々の書

■定價七拾錢

■郵税六錢

海老澤亮氏著

家庭と修養

最新刊

■四六判三百七十頁

■特製定價九十錢

■並製定價七十錢

清潔なる家庭生活が、人の子の教養と幸福とに資するもの多大なるは、萬人の均しく經驗するところ、著者は多年意を此問題にそそぎ、さきに小說「三家庭」を譯出せられたりしが、今又爰に本書を公にして、更に根本的の改善を促さる。著者の家庭或は少年文學に關する識見と、達文とは世すでに定評あり。

本書收むる處、前篇說苑の部には、家庭に關する修養問題あり、教育問題あり、信仰問題あり、親心子心の發揮より婦人の感化に至るまで、總ゆる題目は愛と信仰とを經緯としてうるはしく織出されたり。

更に後篇、文苑の部に至りては、數篇の家庭小說と、宗教お伽噺及聖誕劇等あり、著者は家庭の老幼男女悉く本書の友たらむことを期す。

發兌　東京橋尾張町　警醒社書店　振替東京五五三番

女子青年界第拾壹巻第八號
大正三年九月廿八日印刷納本大正三年十月一日發行　明治卅七年五月七日第三種郵便物認可